

Memoirs of Osaka Institute
of Technology
Vol.59, No.2(2014) pp.47~72

経済学Ⅰ授業アンケート結果 15 年間の推移とその考察 — 1 つの教育記録のその後

上久保 敏

工学部総合人間学系教室

(2014 年 9 月 2 日受理)

A report on a transition of questionnaire results
in the classes of Economics I for 15 years

by
Satoshi KAMIKUBO
Department of Human Sciences,
Faculty of Engineering

Abstract

Using questionnaires, I executed course evaluations in the classes of Economics I continuously for 15 years, and I printed the questionnaire results with the intention of preserving my own educational record instead of for faculty development. This report describes the transition in the questionnaire results for Economics I from 2000 to 2014 as an educational record at the Osaka Institute of Technology, and makes a sequential analysis of mean values of each item in the questionnaires.

The rating mean values of the questionnaire results mostly rose from 2000 to 2004. However, the values reached a peak in 2004 and fell from 2005 to 2007. The means values were mostly unchanged or rose slightly in 2008 and 2009. The values rose again in 2010 because of renewal of the course content, and the values were mostly unchanged from 2011 to 2014.

キーワード ; 授業アンケート, 授業評価, FD, 教育記録

Key Word; questionnaire, course evaluation, faculty development, educational record

はじめに

2010年2月末発行の『大阪工業大学紀要』人文篇第54巻第2号に「経済学Ⅰ授業アンケート結果 10年間の推移とその考察—1つの教育記録として—」という教育レポートを発表し、工学部で担当する2000～2009年度の経済学Ⅰ授業アンケート結果について考察した（<https://www.oit.ac.jp/japanese/toshokan/tosho/kiyou/jinshahen/54-2/03kamikubo.pdf>、以下、本稿ではこの教育レポートを「前稿」と呼ぶことにする）。本稿はその続編に当たり、筆者が2000年度以来続けてきた授業アンケート結果15年間の推移をまとめ、その考察を行ったものである。前稿で発表した1つの教育記録の「その後」を示しておきたい。

前稿を書いたからの5年間に工学部の卒業要件や大学の授業アンケート実施方法に関していくつかの変化があった。経済学Ⅰが分類される総合人間学系共通科目の卒業要件が2010年度から変更になった他、全学的に実施する授業アンケートも2010年度まで採用されていたマークシート用紙に回答する方式に代わり、2011年度からは携帯電話・スマートフォンで回答するシステムが導入された。この携帯電話等を使った授業アンケートは2013年度までは無記名方式であったが、2014年度からは記名式で実施されることになった。

今回は経済学Ⅰで筆者が継続的に実施している授業アンケート¹⁾について2010年度以降の結果に重点を置きながら、2000～2014年度の15年間の推移を見ていくことにする²⁾。

1. 経済学Ⅰの授業内容とアンケートの実施方法

1.1 経済学Ⅰの位置づけと授業内容

経済学Ⅰは前稿でも述べた通り、工学部共通科目（一般教育科目）の中の総合人間学系人文社会科目の1つとして原則2年次以上の学生を対象に開講されている。総合人間学系共通科目のうち人文社会科目は、哲学、倫理学、美術史、文学、言語の世界、法学、経済学、歴史学、心理学などであり、それぞれ前期にⅠ、後期にⅡが開講されている³⁾。

表1-1 経済学Ⅰの授業計画（2014年度）

	テーマ	内容・方法等
第1回	経済学って何？	この授業のねらい・内容、受講上の諸注意について説明した上で、イントロダクションとして経済学とはどんな学問かについて解説する。
第2回	お馴染みの需要曲線・供給曲線を使った説明って現実的なの？	完全競争市場の前提について説明し、需要曲線と供給曲線が交差する市場均衡のグラフを使って、価格調整と数量調整について考えてみる。
第3回	阪神タイガースが優勝したらほんまに大阪の景気は良くなるの？	価格に関する一般均衡分析と部分均衡分析について説明し、一般均衡論的視点と部分均衡論的視点の違いを考える。その上で総合的な見地に立たない議論の危険性を指摘する。
第4回	不快な満員電車に乗って高い運賃払うとはひど過ぎ？	配分と分配の概念の違いを説明し、配分の効率と分配の公正がトレードオフの関係にある例を示す。また、交通経済学でよく用いられるピークロードプライシングについて説明する。
第5回	知ってて当たり前のGDP、中国に抜かれて何か問題？	マクロ経済指標の代表でもあるGDP（国内総生産）とこれに關係する諸概念について説明する。また、現在の日本のGDPについて考える。
第6回	KAMI経済学Ⅰライブを三側面から捉える	生産、支出、所得の三側面からマクロ的に捉える視点の大切さとGDPに関する三面等価について解説する。
第7回	2月にチョコレートが売れるのはバレンタインデーという恵しき慣習があるからです	現実のマクロ経済の動きを掴むのに必要な経済指標に慣れる。季節変動を除去した季節調整値と前期比・前年同期比伸び率について解説する。
第8回	痛いのはKYよりもGY（グラフ読めない）！	寄与度の概念・計算法について説明し、経済指標の推移を示すグラフの読み方について解説する。
第9回	今さらですが、お金とは…	貨幣の諸機能について解説し、貨幣の本質は何であるか、また貨幣が貨幣である理由は何かを考える。
第10回	ご予算の範囲内で満足度が最大になるようガッツリ買いましょう！（経済学で使う数学ってこんな感じ）	予算制約下での効用最大化問題を簡単な数理モデルで説明する。
第11回	家を買うなら～♪	日本の住宅の現状をストック・フローのデータ面から解説し、人生最大の買い物としてしばしば言われる住宅の購入（住宅投資）について考えてみる。
第12回	新聞って何でひどいの？エ大ブックセンターって何で品揃えが悪いの？	競争政策や再販行為について説明した上で、新聞販売の問題点や委託販売制を採る書籍流通の問題点を考察する。
第13回	大学って何でグダグダの授業が多いの？	情報の非対称性の問題を考える。具体的にはモラル・ハザードや逆選択、エージェンシー理論などについて解説する。
第14回	宝塚の経済学	阪急電鉄の創設者・小林一三の経営戦略や宝塚歌劇について経済学的視点から考える。
第15回	経済学Ⅰリクエスト大会	受講者のリクエストに添った総括・補足を行う。

工学部では2009年度以前入学生は卒業するために4年間で134単位を修得する必要があり、そのうちの40単位は共通科目を修得し、更にこの40単位のうち30単位は総合人間学系の共通科目を修得する必要があるという要件を満たさねばならなかった。しかし、2010年度以降入学生の卒業要件は変更され、4年間で必要な修得単位数が124単位になった。更に共通科目40単位の修得という要件は変わらないものの、この40単位のうち16単位は人文社会系科目・総合科目から修得するという要件に変更となった⁴⁾。

1998 年度に大阪工業大学に着任して以来、現在まで毎年度工学部で経済学 I を担当してきたが、授業アンケートが導入された 2000 年度以後の担当コマ数は 2000～2007 年度が 4 コマ（4 クラス）、2008～2012 年度が 3 コマ（3 クラス）、そして 2013・2014 年度が 4 コマであった。前稿でも触れた通り、経済学 I は選択科目のため、年度によって、また、開講される曜日時限（クラス）によって履修者の学科・学年構成は全て異なる。

2014 年度の経済学 I の授業計画は表 1-1 の通りである。2010 年度からこのテーマ・内容で授業を行っている。因みに 2009 年度の授業計画は表 1-2 の通りであり、経済理論そのものの習得よりも現実経済への接近法を習得させることを科目の狙いとしていたが、2010 年度からはアラカルト方式で経済学の基本的な考え方を習得させる内容に変更した。

成績評価も 2010 年度からは定期試験（95 点）、レポート等（1 回分 30 点＋経済学リクエスト票 5 点）、平常点（5 点×初回を除く 14 回分＝70 点）の 3 本建てによる評価（200 点満点を 100 点満点に換算）に改め、2009 年度までよりも平常点を重視する形になった⁵⁾。平常点評価対象物は本学所定の出席票⁶⁾である。毎回授業終了前の 10 分程度の時間にその日の授業の理解度を問う問題の解答を裏面に書かせている。この出席票には授業に関する質問、意見、感想等も記入させ、「ミニッツペーパー」としての役割も若干持たせている。

1.2 経済学 I の授業アンケート実施方法

授業アンケートによる学生の授業評価は初回から最終回までの全てを対象にするべきであるとの考えから、経済学 I では 2000 年度の第 1 回目の授業アンケート以来、最終回の授業で終了約 20 分前に 10 分程度の時間を使ってアンケートを実施してきた。筆者が個別に経済学 I で実施する授業アンケートは現在まで全てアンケート用紙を配布して行っている。

これまで経済学 I の授業アンケートでは 2 度にわたって質問項目の変更を行った。1 回目は 2004 年度であり、これは学内の自己評価委員会で授業アンケートの質問項目の見直しが行われたことに対応するものであった。2

表 1-2 経済学 I の授業計画（2009 年度）

	テーマ	内容・方法等
第1回	そもそも経済って何？	この授業のねらい・内容、受講上の諸注意について説明する。その上で、経済とは何か、経済学とはどんな学問かについて解説する。
第2回	経済指標の読み方を身に付けよう	経済指標の基本的な読み方について解説する。ここでは指標の水準と変化率、変化率の2つの取り方、季節調整等について説明し、実際に演習問題として経済指標の変化率の計算をやらせよう。
第3回		引き続き経済指標の基本的な読み方について、年平均伸び率、年率、名目値・実質値・デフレーターを取り上げて解説する。経済指標を用いてこれらを計算する演習も行う。
第4回		ここでは、構成比・寄与度・寄与率、弾性値について説明し、経済指標の基本的な読み方を徹底的に習得する。経済指標を用いてこれらを計算する演習も行う。
第5回	ようこそ GDP の世界へ	最も注目されている経済指標の1つであるGDPについてみていく。具体的にはGDP統計（SNA）、GDPと国内産出額の違い、付加価値や中間投入、中間生産物や最終生産物の概念等について解説を行う。
第6回		GDPに関連する諸概念をみていき、GDPの世界への理解を深めていく。特に、「国内」と「国民」概念の違い、GrossとNetの意味、要素費用表示と市場価格表示の意味などについて解説する。
第7回		経済現象を一国全体で捉えるマクロ経済的視点に立て、GDPに関する三面等価について解説する。GDEとNL、GDPデフレーターについても説明を加える。
第8回		経済規模の拡大である経済成長について考える。経済成長率の需要項目別寄与度分解の意味を理解し、自分で寄与度分解が出来るよう演習も行う。また、GDP統計が抱える限界についても説明する。
第9回	「経済のコア」消費を解剖しよう	経済の核をなしている個人消費について説明する。具体的には、家計による消費の経済的意味、消費動向に影響を与える要因などについて解説する。
第10回		日本における現実の消費動向を把握するためには、どのような指標に注目すればいいのか、消費関連指標の紹介とその見方について解説する。
第11回		日本の消費構造の変化と現状について解説する。また、消費とコインの表裏の関係にあるわが国の貯蓄動向についても考察する。
第12回	住宅投資について学んでみよう	持家や貸家の建設などを示す住宅投資についてその経済的性質や変動要因を説明する。
第13回		日本における住宅投資の動向を見ていく上で、どのような指標に注目すればいいのかを説明する。また、住宅投資と密接に関連する日本の地価動向についても言及する。
第14回	日本経済の現状と経済学 I の総括	日本経済に関する政府の公式見解である「月例経済報告」を取り上げて、日本経済の現状を考察し、各回の内容の総括を行う。また、定期試験の注意事項についても述べる。

回目は 2010 年度である。2008 年度に自己評価委員会のアンケート用紙では質問項目の大幅変更が行われたが、データの継続性を重視して、経済学 I の授業では 2008、2009 年度も 2007 年度以前と同じ質問項目のアンケート用紙を用いた。しかし、2009 年度に前稿をまとめたこともあり、2010 年度は自己評価委員会のマークシート方式による用紙を使うことにした。2011 年度から携帯電話・スマートフォンによる回答方式（C-Learning システム）が全学的に導入されたが、それとは別にデータの継続性という観点に立って（マークシート方式ではない選択肢の番号に○を付ける）紙の調査票による授業アンケートを経済学 I で

は引続き実施している（巻末＜参考 1＞の 2014 年度経済学 I 授業アンケート用紙参照）。

表 1－3 経済学 I 授業アンケートの質問項目（2010 年度以降）

問 1	この授業の進め方や到達目標について説明がありましたか
問 2	この授業にどの程度出席しましたか 5:100% 4:80%～100%未満 3:60%～80%未満 2:40%～60%未満 1:40%未満
問 3	この授業に意欲的に取り組みましたか (勉学意欲をもってこの授業に取り組みましたか)
問 4	この授業の内容は十分理解できましたか
問 5	この授業の到達目標を達成できましたか
問 6	この授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか
問 7	この授業は学生の理解度を配慮しながら進められましたか (この授業は教員の一方的な講義ではなく、学生の理解度を配慮しながら進められたと思いますか)
問 8	この授業の教員の声や発声は明瞭で、聞き取りやすかったですか
問 9	この授業で黒板やスクリーンの図や文字は見やすかったですか (この授業で黒板やOHPなどの文字は見やすかったですか)
問 10	この授業の担当教員から授業に対する熱意を感じましたか (この授業に対する教員の熱意を感じましたか)
問 11	総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか (この授業の満足度(受講価値があった、友人に受講を薦める等)はどうでしたか。)
問 12	この授業では勉学をする雰囲気は保たれていましたか (この授業では教室内の秩序(勉強をする雰囲気)は保たれましたか。)
問 13	この授業により、この分野に対する興味が増しましたか (この授業により、この分野に興味がわきましたか。)
問 14	この授業はあなたの将来に広い意味で役に立つと思いますか
問 15	配布資料は教材として有益でしたか
問 16	この授業の総合評価を5段階でして下さい

(注)問2、3、7、9～13は2000～03年度までの質問文を()内に、2004～09年度までの質問文を〔 〕内に示した

2010 年度以降の授業アンケートの質問項目は表 1－3 の通りである。問 2 「出席状況」と問 16 「総合評価」以外は、5 「大変そう思う」、4 「そう思う」、3 「どちらとも言えない」、2 「そう思わない」、1 「まったくそう思わない」の 5 つの選択肢から該当するものを選択させる 5 段階の評定尺度法による設計となっている⁷⁾。問 1～16 の下には自由記述欄を設けて「この授業のよかった点もしくは改善すべき点は何ですか。なるべく具体的に記述して下さい。また、この授業を良くするための意見や授業を受けての率直な感想など何でも自由に書いて下さい。（書ききれない時は裏に書いても可）」という設問を置き、授業の改善意見や率直な感想の記入を求めている。自由記述欄の下には所属学科・学年に○を付ける学科・学年欄を置いている。

経済学 I の授業アンケートを実施する際には、アンケート結果は定期試験時にプリント

にまとめて配布することを必ず受講者に伝えるようにしている⁸⁾。またこの際に、自由記述欄に書かれていた意見・感想等も全てアンケート結果のプリントに収録し、コメントを付ける旨を受講者に伝えるようにして、授業に対する改善意見だけでなく率直な感想等も是非記入するように促している。

定期試験時に受講者に配布する授業アンケート結果のプリントは B4 用紙表側左半分にアンケート結果の総括文を書き、右半分に全質問項目の回答割合と当該年度までの評定平均値、曜日時限（クラス）別の評定平均値のグラフなどを付けている。B4 用紙の裏面は自由記述欄にあったすべての意見・感想・要望を大雑把に内容で分類して掲載し、担当者からの簡単なコメントを内容分類ごとにつけている。2004 年度からは自由記述欄への記入件数が増えたため、B4 用紙 1 枚分（両面印刷）を追加して、B4 用紙都合 2 枚を 1 セットとして受講者に配布するようになった。更に 2012 年度からは自由記述欄に 400 件前後の記入があったため、B4 用紙をもう 1 枚追加して、B4 用紙都合 3 枚（いずれも両面印刷）を 1 セットとして配布するに至っている。

前稿でも述べたが、授業アンケート結果を定期試験時にプリントで配布するのは、①アンケート協力者である受講者に結果を還元する、②アンケート結果の公表（単に数字だけでなく自由記述も含めた公表）を約束することで自由記述欄への記入を促す、③受講者が自分の評価と受講者全体の評価との異同を確認し、また他の受講者の意見・感想（批判的意見・好意的意見それぞれ）を確認できる機会を提供する、④担当者自身のために授業の記録を残す、という 4 つの理由からである。

しかし、定期試験開始前に配布した授業アンケート結果のプリントのうちの相当数が、定期試験終了直後の教室で大量のノートや配布資料に混じって、こちらが用意した廃棄用のカゴの中に投棄されることを前稿で指摘したが、その状況は現在も全く変わっていない。授業アンケート結果のプリントは受講者に真剣に読まれているとは言い難いのが実情であり、受講者の授業アンケート結果に対する関心は決して高くないように思われる。

2. 2014 年度経済学 I 授業アンケート結果の概況

ここではまず直近の 2014 年度経済学 I 授業アンケート結果について、①各質問項目の回答割合、②評定平均値と標準偏差、③質問項目間の相関係数、④自由記述の 4 点から概況を見ていく。アンケートの回答状況は表 2-1 の通りである。2014 年度は月曜 2 時限、水曜 2 時限、同 3 時限、木曜 1 時限の計 4 コマ（4 クラス）開講したが、以下で示す回答割合や評定平均値などのデータは全て 4 コマ合計でみたものである。

表 2-1 2014 年度経済学 I 授業アンケートの回答状況

	履修者数	回答数	回答率(%)
月曜2時限	188	149	79.3
水曜2時限	194	149	76.8
水曜3時限	200	166	83.0
木曜1時限	260	212	81.5
4コマ合計	842	676	80.3

2.1 各質問項目の回答割合

各質問項目（表 1-3 参照）の 5 段階評定（1～5）の各回答数を全回答数（グラフ中の N の値）で割って回答割合を算出した。以下では、全質問項目を 6 つにグループ分けし、回答割合に基づいて結果の概況をまとめた。

(1) 受講者の授業への取り組み

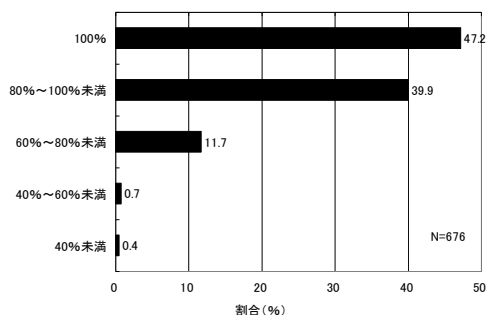


図 2-1 問 2 この授業にどの程度出席しましたか

問 2「この授業にどの程度出席しましたか」を見ると、出席率 100%の受講者は回答者数（＝最終回授業出席者数）の 47.2%、出席率

80%以上まで合わせると 87.1%となり、最終回に出席した受講者に関する限り 9 割近い学生が全 15 回の授業中 12 回以上は出席していたことがわかる（図 2-1）。

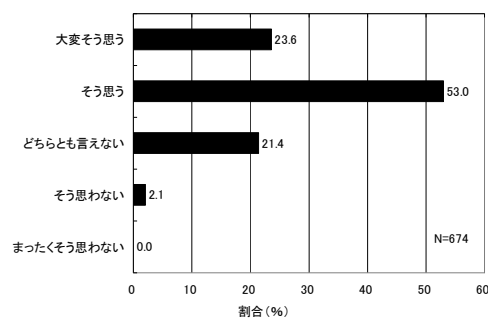


図 2-2 問 3 この授業に意欲的に取り組みましたか

問 3「この授業に意欲的に取り組みましたか」に関しては 76.6%の受講者が「大変そう思う」または「そう思う」と回答しており、「まったくそう思わない」は 0%であった（図 2-2）。

(2) 受講者の授業理解

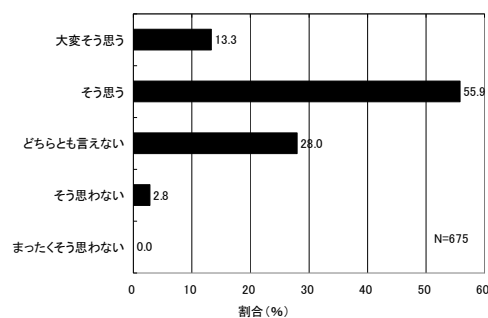


図 2-3 問 4 この授業の内容は十分理解できましたか

問 4「この授業の内容は十分理解できましたか」は「大変そう思う」と「そう思う」を合わせて 69.2%であり（図 2-3）、問 5「この授業の到達目標を達成できましたか」は同じく 69.1%であった（図 2-4）。内容理解や到達目標達成に関しては肯定的な回答をする受講者は 7 割を切っており、受講者の自己評価から見る限り経済学 I の授業理解は決して高くないという結果になっている。

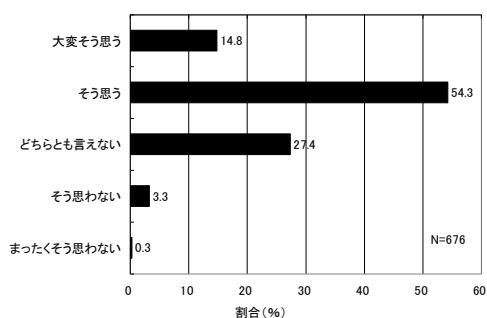


図 2-4 問 5 この授業の到達目標を達成できましたか

(3) 担当者の授業の進め方

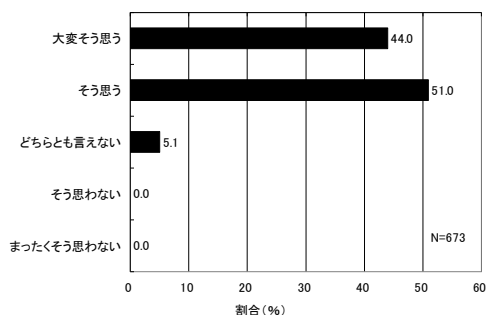


図 2-5 問 1 この授業の進め方や到達目標について説明がありましたか

問 1 「この授業の進め方や到達目標について説明がありましたか」は「大変そう思う」が 44.0%、「そう思う」が 51.0%で（図 2-5）、正しく伝わったかどうかは別にせよ、初回授業で説明を行ったことはほとんどの受講者に記憶されていたとみられる。

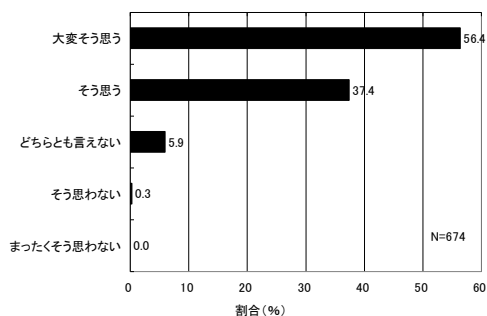


図 2-6 問 6 この授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか

問 6 「この授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか」は「大変そう思う」が 56.4%、「そう思う」が 37.4%で（図 2-6）、シラバスに沿って授業が行われたことは 9 割以上の受講者から認められた。

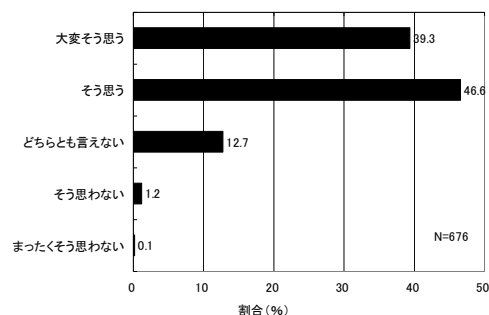


図 2-7 問 7 この授業は学生の理解度を配慮しながら進められましたか

問 7 「この授業は学生の理解度を配慮しながら進められましたか」は「どちらとも言えない」という回答が 12.7%を占めるものの、「大変そう思う」、「そう思う」を合わせた回答割合は 85.9%であり（図 2-7）、理解度に配慮しながら授業を進めていたと受講者に概ね受け止められる結果となった。

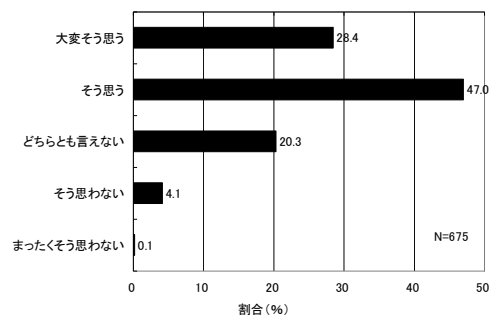


図 2-8 問 12 この授業では勉学をする雰囲気が保たれていましたか

問 12 「この授業では勉学をする雰囲気が保たれていましたか」は「大変そう思う」が 28.4%、「そう思う」が 47.0%で肯定的評価が受講者の 4 分の 3 程度にとどまる一方で、「どちらとも言えない」が 20.3%、「そう思わない」が 4.1%となるなど（図 2-8）、教室内の秩

序維持に関しては不十分という結果になった。 多くの意見が書かれており、評価が分かれる結果となっている。

(4) 担当者の授業技術

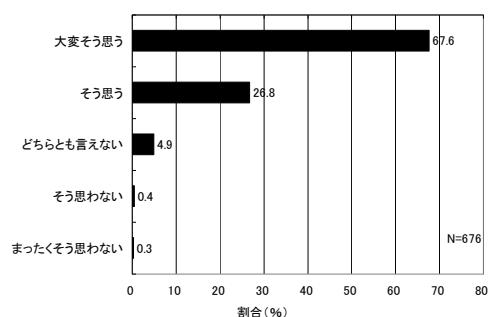


図2-9 問8 この授業の教員の声や発声は明瞭で、聞き取りやすかったですか

問8「この授業の教員の声や発声は明瞭で、聞き取りやすかったですか」は「大変そう思う」が67.6%、「そう思う」が26.8%となり（図2-9）、授業技術のうち口頭説明による部分についてはほとんど問題がなかったことを確認できる。

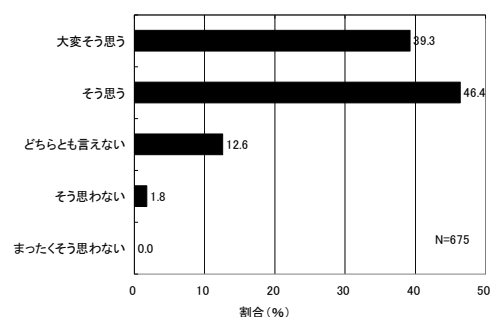


図2-11 問15 配布資料は教材として有益でしたか

また、問15「配布資料は教材として有益でしたか」については12.6%の受講者が「どちらとも言えない」を選択しているものの、「大変そう思う」と「そう思う」を合わせると85.7%であり（図2-11）、配布資料に対しては有益であるとの評価が概して得られた。

(5) 受講者の満足度・興味喚起

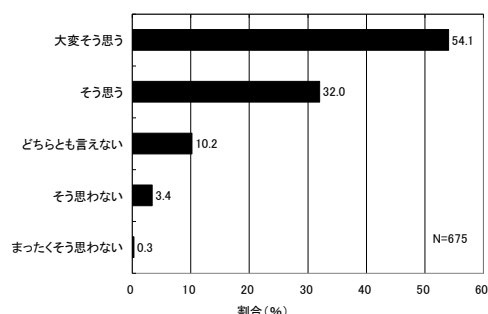


図2-10 問9 この授業で黒板やスクリーンの図や文字は見やすかったですか

しかし、問9「この授業で黒板やスクリーンの図や文字は見やすかったですか」については「大変そう思う」が54.1%、「そう思う」が32.0%となった一方で、「どちらとも言えない」が10.2%、「そう思わない」が3.4%、「まったくそう思わない」が0.3%と約14%の受講者からは板書技術に関して肯定的に評価されない結果となった（図2-10）。後述する通り、板書に関しては自由記述欄でも多

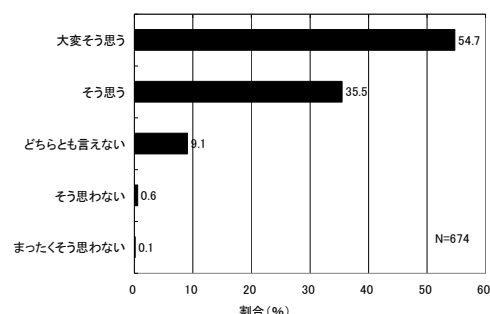


図2-12 問11 総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか

受講者の満足度を示す問11「総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか」は「大変そう思う」が54.7%と回答者の半数を超え、「そう思う」も35.5%であった（図2-12）。約9割の受講者にとって一定の満足感が得られる授業であったことを確認できるが、「どちらとも言えない」に○を付けた受講者も9.1%存在し、満足度の点で受講者の全面的支持を得られたとまでは言い難い

結果である。

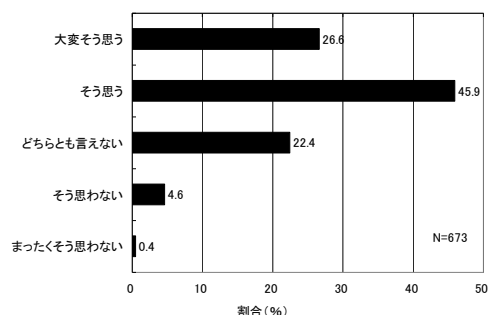


図 2-13 問 13 この授業により、この分野に対する興味が増しましたか

また、興味喚起力の点では課題が残る結果となった。すなわち問 13「この授業により、この分野に対する興味が増しましたか」は「大変そう思う」が 26.6%、「そう思う」が 45.9%にとどまる一方で、「そう思わない」が 4.6%、「どちらとも言えない」にいたっては 22.4%と、2割を超える受講者から肯定的評価が得られなかった（図 2-13）。

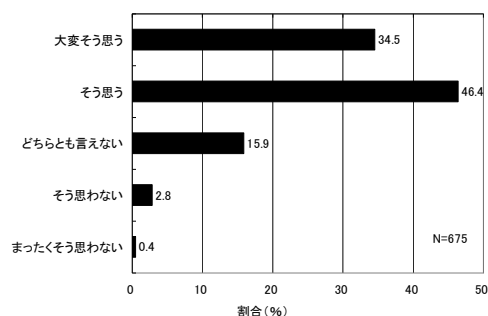


図 2-14 問 14 この授業はあなたの将来に広い意味で役に立つと思いますか

さらに問 14「この授業はあなたの将来に広い意味で役に立つと思いますか」についても受講者の 80.9%から「大変そう思う」「そう思う」という肯定的な回答が得られているが、「どちらとも言えない」という回答が 15.9%存在し（図 2-14）、興味喚起と同様に実践性が課題として残る結果となった。

(6)担当者の熱意・総合評価

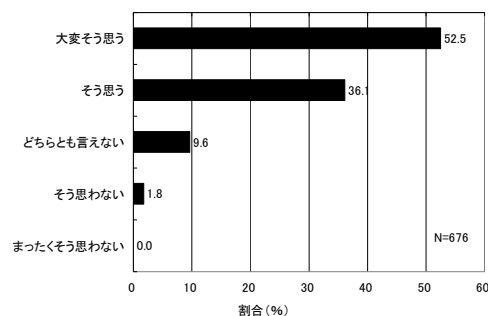


図 2-15 問 10 この授業の担当教員から授業に対する熱意を感じましたか

問 10「この授業の担当教員から授業に対する熱意を感じましたか」は「大変そう思う」が 52.5%、「そう思う」が 36.1%となり（図 2-15）、100%とは言えぬものの受講者の 9割弱には授業者の熱意が伝わったとみられる。

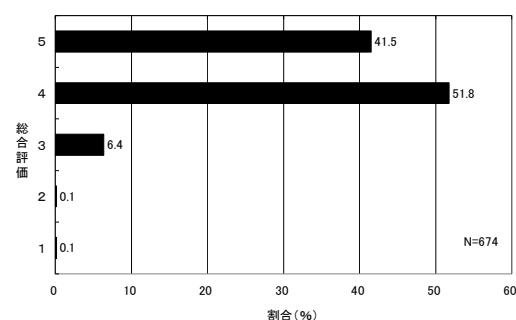


図 2-16 問 16 この授業の総合評価を 5 段階でして下さい

問 16「この授業の総合評価を 5 段階でして下さい」は 4 を選んだ受講者の割合が 51.8%と最も高く、5 は 41.5%にとどまった。9割を超える受講者が 4 以上の評価を与えており、また 2 と 1 を選んだ者はそれぞれ全体の 0.1%ずつであったが、中間の 3 を選択した受講者が 6.4%いた（図 2-16）。

2.2 各質問項目の評定平均値と標準偏差

評定平均値（5 段階の選択肢からの回答の平均値）に関して、合理的な理由はないものの筆者は全質問項目において評定平均値が 4 を超える結果が得られることを一応の目標と

している。もちろん、評定平均値が4を上回ればそれで良いという訳ではない。全質問項目で評定平均値が5に近ければ近い方が望ましいということになるが、あくまでそれは1つの理想である。現実を考えると「悪くとも4は上回っていて欲しい」という意味で最低ラインを評定平均値4としている。2000年度の授業アンケート開始以来、4を下回る質問項目が毎年度出ている現実から考えて、全項目で評定平均値が4を超えることを1つの目標にするということである。

表2-2 2014年度経済学Ⅰの評定平均値と標準偏差

質 問 項 目	評定平均値	標準偏差
問 1 進め方・到達目標の説明	4.39	0.65
問 2 出席状況	4.33	0.74
問 3 意欲的に取り組む	3.98	0.76
問 4 授業の内容理解	3.80	0.71
問 5 到達目標達成	3.80	0.73
問 6 シラバスに沿った内容か	4.50	0.67
問 7 学生の理解度への配慮	4.24	0.72
問 8 教員の声や発声	4.61	0.63
問 9 黒板の図・文字	4.36	0.84
問10 授業に対する熱意	4.39	0.73
問11 受講してよかったか	4.44	0.73
問12 勉学する雰囲気	3.99	0.83
問13 授業で興味が増したか	3.94	0.88
問14 将来役立つか	4.12	0.82
問15 配布資料	4.23	0.75
問16 総合評価	4.34	0.66

2014年度の経済学Ⅰ授業アンケート結果の評定平均値は表2-2のようになった⁹⁾。2014年度の評定平均値が最も低い質問項目は問4「授業の内容理解」と問5「到達目標達成」でともに3.80と目標の4を大きく割り込む結果となった。次に評定平均値が低いのが問13「授業で興味が増したか」の3.94であり、問3「意欲的に取り組む」の3.98、問12「勉

学する雰囲気」の3.99がこれに続いた。このように2014年度は全部で16の質問項目中5つの質問項目で目標の4を下回った。

一方、評定平均値が最も高くなったのは問8「教員の声や発声」の4.61であり、次いで問6「シラバスに沿った内容か」の4.50、問11「受講してよかったか」の4.44であった。

以上より、評定平均値からみた2014年度の経済学Ⅰは受講者の内容理解や到達目標達成が明らかに低く、また勉学意欲や教室の秩序、興味喚起の点で課題を残すことになった。

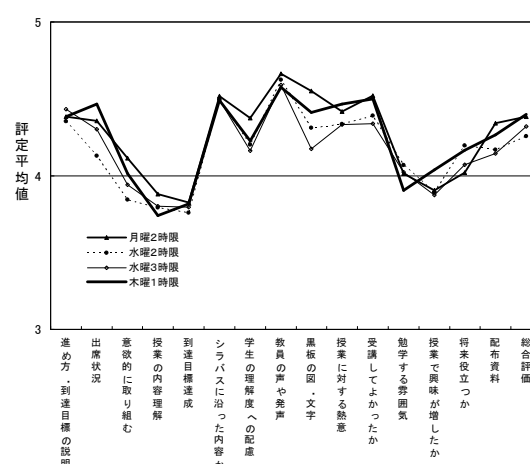


図2-17 開講曜日時限別（クラス別）にみた2014年度経済学Ⅰの評定平均値

次に、開講曜日時限別（クラス別）に評定平均値を見てみると（図2-17）、質問項目によっては明らかにクラス間で評価に差が生じる結果となった。

問1「進め方・到達目標の説明」、問5「到達目標達成」、問6「シラバスに沿った内容か」、問8「教員の声や発声」については評定平均値のクラス間格差（最も高いクラスと最も低いクラスの間における評定平均値の差）は0.03～0.09と0.1ポイントを切っている。全く同じ内容、やり方で授業を行っているため、評定平均値にクラス間の差が生じないのは当然とも言える。

これに対して、問9「黒板の図・文字」では評定平均値が最も高い月曜2時限クラスと最も低い水曜3時限クラスの間で0.38ポイン

トの格差が生じている。水曜 3 時限クラスは既に 2 時限の授業で教室が使用されていたため、黒板が汚れた状態で授業を開始するのに対し、月曜 2 時限クラスは 1 時限が空き教室となっているため、黒板が未使用の状態で授業を開始するという違いはある。また 5 月の連休以降、月曜授業は水・木曜授業よりも 1 週遅れとなり、担当者として板書に慣れが生じていたという面もある。しかし、これらの点を考慮しても 0.38 ポイントの格差は大きい。

この他に評定平均値のクラス間格差が大きいのは問 2「出席状況」（木曜 1 時限と水曜 2 時限で 0.34 ポイントの格差）、問 3「意欲的に取り組む」（月曜 2 時限と水曜 2 時限で 0.27 ポイントの格差）、問 7「学生の理解度への配慮」（月曜 2 時限と水曜 3 時限で 0.21 ポイントの格差）、問 15「配布資料」（月曜 2 時限と水曜 3 時限で 0.20 ポイントの格差）であり、問 11「受講してよかったか」、問 12「勉学する雰囲気」、問 13「授業で興味が増したか」、問 14「将来役立つか」でも 0.16～0.18 ポイントの格差が確認できる。

こうした評定平均値のクラス間格差の存在とも関係するが、授業に対する評価のばらつきを示す標準偏差を表 2-2 で見てみると、問 13「授業で興味が増したか」が 0.88 と最も高く、続いて問 9「黒板の図・文字」の 0.84、問 12「勉学する雰囲気」の 0.83、問 14「将来役立つか」の 0.82 となっている。反対に評価のばらつきが最も小さい質問項目は問 8「教員の声や発声」で標準偏差は 0.63 であった。問 1「進め方・到達目標の説明」が 0.65、問 16「総合評価」が 0.66、問 6「シラバスに沿った内容か」が 0.67 でこれに続いている。興味喚起や板書、教室の秩序については受講者間で評価のばらつきが大きいという結果になった。

2.3 質問項目間の相関係数

2014 年度経済学 I の授業アンケート全回答数 676 件のデータから質問項目間の相関係数を算出し、マトリックスの形でまとめたのが表 2-3 である。相関係数は全て正の値となっているが、0.7 を上回るものは 1 つもなく、質問項目間において特に強い相関は総じて認

められない。

ここでは受講者の授業に対する総合的な受け止め方を考察するため、授業の総合評価と満足度に絞って見ておきたい。まず、問 16「総合評価」については問 2「出席状況」を除く全ての質問項目との間で相関係数は 0.3 以上となった。最も高い相関を示したのは問 11「受講してよかったか」の 0.637 であった。以下、問 7「学生の理解度への配慮」（0.514）、問 15「配布資料」（0.507）、問 10「授業に対する熱意」（0.466）、問 13「授業で興味が増したか」（0.460）、問 6「シラバスに沿った内容か」（0.451）が続いた。いずれも強い相関があるとは言えないが、2014 年度の経済学 I に関しては満足感が得られるかどうかやわかりやすさ、興味深さなどが総合評価に関係していたことが確認できる。

総合評価と最も高い相関を持つ問 11「受講してよかったか」については、「総合評価」を別にすると、問 10「授業に対する熱意」（0.493）、問 15「配布資料」（0.477）、問 8「教員の声や発声」（0.451）、問 6「シラバスに沿った内容か」（0.444）、問 13「授業で興味が増したか」（0.439）、問 7「学生の理解度への配慮」（0.437）の順に相関係数が高かった。受講者にとっての満足度が教員の授業に対する取り組み姿勢や授業の進め方・技術と関わっていることを示唆する結果となった。

2.4 自由記述

2014 年度経済学 I の授業アンケートでは自由記述欄に全回答数 676 件の 59.9% に当たる 405 件の記入があった。10 人のうち約 6 人が自由記述欄に意見や感想を記入したことになる。

書かれている意見や感想は千差万別である。1 つの回答の中に複数の点にわたる指摘や意見、感想が書かれていることも多く、自由記述欄の意見・感想の分類を綿密に行うのには時間を要するため、ここでは授業に対する批判的部分を優先して大雑把な分類を行った（図 2-18）。すなわち、例えば「私語が気になったが、楽しく受講できた」、「授業がわかりやすく面白い。プリントが見にくかつ

表 2-3 2014 年度経済学 I 授業アンケートの質問項目間相関係数マトリックス

(N=676)

	問一 進め方・到達目標	問二 出席状況	問三 意欲的に取り組む	問四 授業の内容理解	問五 到達目標達成	問六 シラバスに沿った内容か	問七 学生の理解度への配慮	問八 教員の声や発声	問九 黒板の図・文字	問一〇 授業に対する熱意	問一一 受講してよかったか	問一二 勉学する雰囲気	問一三 授業で興味が増したか	問一四 将来役立つか	問一五 配布資料	問一六 総合評価
問1	1.000	0.159	0.339	0.306	0.313	0.433	0.370	0.372	0.217	0.366	0.373	0.276	0.261	0.273	0.303	0.399
問2	0.159	1.000	0.288	0.180	0.228	0.191	0.133	0.146	0.068	0.112	0.173	0.035	0.111	0.092	0.122	0.194
問3	0.339	0.288	1.000	0.505	0.497	0.322	0.326	0.216	0.263	0.313	0.367	0.260	0.376	0.294	0.320	0.438
問4	0.306	0.180	0.505	1.000	0.655	0.316	0.377	0.194	0.258	0.258	0.326	0.288	0.370	0.333	0.332	0.419
問5	0.313	0.228	0.497	0.655	1.000	0.297	0.371	0.186	0.216	0.215	0.332	0.322	0.356	0.289	0.293	0.410
問6	0.433	0.191	0.322	0.316	0.297	1.000	0.430	0.439	0.256	0.355	0.444	0.279	0.275	0.274	0.339	0.451
問7	0.370	0.133	0.326	0.377	0.371	0.430	1.000	0.472	0.334	0.361	0.437	0.331	0.280	0.292	0.346	0.514
問8	0.372	0.146	0.216	0.194	0.186	0.439	0.472	1.000	0.484	0.441	0.451	0.257	0.274	0.278	0.292	0.418
問9	0.217	0.068	0.263	0.258	0.216	0.256	0.334	0.484	1.000	0.403	0.390	0.306	0.276	0.240	0.302	0.384
問10	0.366	0.112	0.313	0.258	0.215	0.355	0.361	0.441	0.403	1.000	0.493	0.348	0.367	0.338	0.355	0.466
問11	0.373	0.173	0.367	0.326	0.332	0.444	0.437	0.451	0.390	0.493	1.000	0.394	0.439	0.343	0.477	0.637
問12	0.276	0.035	0.260	0.288	0.322	0.279	0.331	0.257	0.306	0.348	0.394	1.000	0.328	0.291	0.349	0.384
問13	0.261	0.111	0.376	0.370	0.356	0.275	0.280	0.274	0.276	0.367	0.439	0.328	1.000	0.474	0.368	0.460
問14	0.273	0.092	0.294	0.333	0.289	0.274	0.292	0.278	0.240	0.338	0.343	0.291	0.474	1.000	0.426	0.439
問15	0.303	0.122	0.320	0.332	0.293	0.339	0.346	0.292	0.302	0.355	0.477	0.349	0.368	0.426	1.000	0.507
問16	0.399	0.194	0.438	0.419	0.410	0.451	0.514	0.418	0.384	0.466	0.637	0.384	0.460	0.439	0.507	1.000

た」というような意見・感想は「授業全般への好意的感想・謝辞」には分類せずに、それぞれ「私語」「配布資料」に分類するようにした。また、批判の対象が複数に及ぶ意見に関しては、批判や要望のより強い方に分類することにした。例えば「配布資料が見にくい時がある。毎回、私語がひどいので何らかの改善をして欲しかった」といった意見は「私語」に分類している。

今回担当者として最も気になったのは「板書の量・字・見やすさ・チョーク」に関する意見・感想が 58 件出たことである。このうち、「板書の字が汚い」、「板書が見にくい」、「もっと丁寧に書いて欲しい」といった批判的意見や要望が 15 件ある一方で、「字が大きくて見やすい」という感想も 24 件書かれていた。つまり、板書に関しては相反する意見が多く書かれることになり、これは先述した問 9「黒板の図・文字」の評定平均値のクラス間格差が全質問項目の中で最も大きいことや標準偏差が 2 番目に高いこととも対応している。チョークが頻繁に折れることに対する意見も 12 件書かれていた(2013 年度はゼロ件)。チョークが頻繁に折れるのは例年通りであったが、そのことについて授業中に言及することが何回かあったために、授業アンケートでの指摘に繋がったとみられる。

また、担当者が授業で使う小道具類(扇子など)や趣味に関する意見・質問等も 50 件を超える記入があったが、これは例年通りの傾向である。私語に対する苦情も多数あり、反省すべき点は多い。授業の進め方に関する意

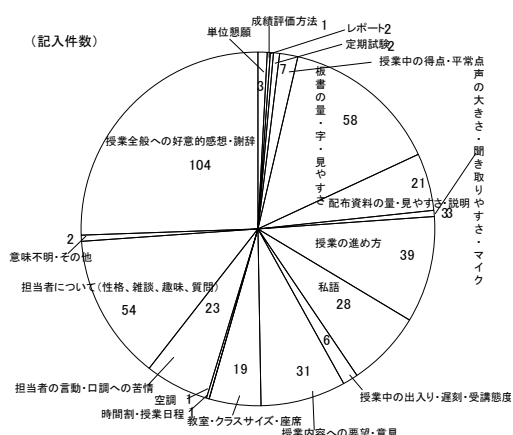


図 2-18 2014 年度経済学 I 授業アンケートの自由記述(405 件)の分類

見も多く、当方のやり方に賛同する意見も見られる一方で、「重要部分の説明は口頭ではなく板書で」といった要望もあった。こうした要望は以前よりも減ったものの受講者に主体的な取り組みを期待する立場からすれば、どこまで汲むべきか迷うところである。

2014年度の自由記述欄に書かれていた意見で、意表を突かれたのは次の意見であった。

「質問しようとしても、授業を理解できてないことについておこられそうで気が進まない。『なぜこんなことも分からないのか』と言われそう。」。質問があれば出席票の裏に書かせることにしており、実際に質問を記入する受講者も多い。「なぜこんなことも分からないのか」と言われそうと思わせるような雰囲気は授業で作っているとしたら、それは大いに反省すべきことだと重く受け止めている。

「もう少し掘り下げた話や、その内容に関わりのある例を増やした方が理解する材料が増えて解りやすくなると思います。」という意見には「その通り」としか返せない。特に掘り下げが浅い点は自分でも日々懸念するところである。「この授業はかた苦しい授業ではないので楽に受けることができ、説明にわかりやすい例えを用いたので、理解しやすかった。」という意見は受講者本人としては好意的に授業を評しているつもりなのであろうが、楽に受けることができる授業が良いのかどうか、「理解しやすかった」というのは内容に深みがないことの裏返しではないのか等々、教員側の視点に立つと考えさせられる。

3. 2014年度経済学Ⅰの携帯電話等を利用した授業アンケート結果との比較

3.1 携帯電話等を利用した授業アンケート

1.2で述べた通り、2011年度より全学的に携帯電話・スマートフォンを利用した授業アンケートシステム(C-Learning)が導入された。受講者は携帯電話・スマートフォンで所定の専用サイトにアクセスし、ログイン後にアンケートに回答して提出する。このシステムにより教員側も直ちにアンケート結果を確認して、結果に対するコメントを迅速に記入すること(受講者へのフィードバック)ができる

ようになっている。なお、教員側が受講者に対して行う授業アンケートへの協力の呼び掛けは第14・15回授業で実施することになっているが、システム上、受講者側による回答は所定のアンケート回答期間中であればいつでもまたどこからでも(もちろん授業教室外からでも)可能である。

表3-1 携帯電話等を利用した授業アンケートの設問

設問の内容	選択肢
設問1 この授業は、「授業のねらい、到達目標、進め方、使用する教科書・参考書、成績評価方法」について、授業初回に資料などを用いて説明が適切に行われましたか?	A
設問2 この授業は、シラバス記載内容あるいは授業初回の説明に沿って進みましたか?	B
設問3 この授業は、学生の理解度を配慮しながら進められましたか?	C
設問4 この授業は、教員の話し方は明瞭で、わかりやすかったですか?	C
設問5 この授業は、黒板の使い方、文字の大きさ・見やすさ、映像資料の図や文字の見やすさ、は適切でしたか?	A
設問6 この授業の進捗度は、内容を理解し到達目標を達成するのに適切でしたか?	A
設問7 あなたは現時点で、この授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか?	D
設問8 この授業1回あたり平均して、予習・復習・レポート作成・課題作成(準備)に何時間かけましたか?	E
設問9 総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか?	C
設問10 この授業を良くするための意見、改善して欲しい事項があれば入力してください。	—

<設問1～9の選択肢の種類>

A 5:適切であった 4:ほぼ適切であった 3:どちらとも言えない 2:あまり適切でなかった 1:まったくなかった
B 5:進んだ 4:ほぼ進んだ 3:どちらとも言えない 2:あまり進まなかった 1:まったく進まなかった
C 5:強く思う 4:やや思う 3:どちらとも言えない 2:あまりそう思わない 1:まったく思わない
D 5:100%～90% 4:90%未満～80% 3:80%未満～70% 2:70%未満～60% 1:60%未満
E 5:3時間以上 4:2時間台 3:1時間台 2:30分～1時間 1:30分未満

2013年度までは期末に行うこのアンケートは無記名式で実施されていたが¹⁰⁾、2014年度よりIR(インスティテューショナル・リサーチ)実践の見地から全学的に記名式で実施することになった。携帯電話等を利用した授業アンケートの設問は表3-1の通りである。選択肢から選ばせる設問数は9であり、最後に授業を良くするため、改善するための意見を自由記述欄に記入させる質問が設けられている。

3.2 携帯電話等を利用した授業アンケート(記名式)結果の概要

携帯電話等を利用した授業アンケート結果(2014年度経済学Ⅰ担当4コマ分の合計)を表3-2にまとめた。設問7「到達目標達成度合い」と設問8「予復習・レポート等作成時間」を除き、どの設問項目においても選択肢5と4を選んだ回答者の割合が80%台後半

から 90% 台前半となった。

また、設問 7・8 以外の設問項目の評定平均値は 4.3～4.6 の範囲に収まっており、評定平均値が最も高いのは設問 2「シラバスに沿った内容か」の 4.51、最も低いのは設問 6「授業進行度の適切さ」と設問 9「受講してよかったか」の 4.36 であった。標準偏差は設問 7・8 以外の設問項目ではいずれも 0.7 台になっている。

表 3-2 2014 年度経済学 I の携帯電話等を利用した授業アンケート結果

設 問	回答の構成比 (%)					評定平均値	標準偏差
	5	4	3	2	1		
設問1 初回授業での諸説明	58.9	33.0	7.4	0.0	0.7	4.49	0.70
設問2 シラバスに沿った内容か	62.8	27.3	8.6	0.7	0.5	4.51	0.73
設問3 学生の理解度への配慮	52.0	35.7	10.8	0.7	0.7	4.37	0.76
設問4 話し方は明瞭だったか	60.3	29.6	9.1	0.5	0.5	4.49	0.72
設問5 黒板の使い方・文字	55.7	34.2	9.4	0.5	0.2	4.45	0.70
設問6 授業進行度の適切さ	48.5	40.6	9.9	0.7	0.2	4.36	0.71
設問7 到達目標の達成割合	19.0	37.4	30.5	10.1	3.0	3.59	1.00
設問8 予復習・レポート作成時間	10.3	16.0	28.8	19.0	25.9	2.66	1.30
設問9 受講してよかったか	53.2	32.5	12.3	1.5	0.5	4.36	0.79

3.3 記名式と無記名式の比較

同一の授業について授業アンケートの結果が記名式と無記名式とでどの程度の差が出るかを見るため、2014 年度経済学 I の携帯電話等を使った授業アンケート結果（以下「記名式」と呼ぶ）を 2. でみた経済学 I で独自に実施している授業アンケート結果（以下「無記名式」と呼ぶ）と質問内容が似通っている質問項目に絞って比較してみる（表 3-3）。ただし、アンケートの回答数は記名式が 406 件（回答率 48.2%）、無記名式が 676 件（同 80.3%）と異なる上に、携帯電話等を使った授業アンケートでは最終回の授業時間以外にも回答が行われているという違いがある。また、質問内容についても若干異なっている。このため、厳密には単純比較できないが、記名式と無記名式の間で結果に違いが出るかどうかを知る上で 1 つの参考にはなる。

「シラバスに沿った内容か」については記名式と無記名式の間で評定平均値にほぼ差はなく、標準偏差は記名式が無記名式を 0.06 ポ

イント上回った。「学生の理解度への配慮」については記名式の評定平均値の方が無記名式よりも 0.13 ポイント高く、標準偏差も記名式が無記名式より 0.04 ポイント高くなった。「黒板の使い方・文字」についても記名式の方が無記名式より評定平均値が 0.09 ポイント高くなっており、逆に標準偏差は無記名式の方が記名式よりも 0.14 ポイント高い。これに対して「話し方・発声の明瞭さ」の評定平均値は記名式よりも無記名式の方が 0.12 ポイント高く、逆に標準偏差は記名式が無記名式よりも 0.09 ポイント高い。同様に「受講してよかったか」の評定平均値も記名式よりも無記名式の方が 0.08 ポイント高く、逆に標準偏差は無記名式よりも記名式が 0.06 ポイント高いという結果であった。総じて、記名式と無記名式の間で評定平均値の差は 0.1 ポイント前後の差しかなく、標準偏差についても大きな差が出ていないことがわかる。

表 3-3 2014 年度経済学 I 授業アンケートにおける記名式と無記名式との結果の比較

設 問 の 内 容	評定平均値		標準偏差	
	記名式	無記名式	記名式	無記名式
シラバスに沿った内容か	4.51	4.50	0.73	0.67
学生の理解度への配慮	4.37	4.24	0.76	0.72
話し方・発声の明瞭さ	4.49	4.61	0.72	0.63
黒板の使い方・文字	4.45	4.36	0.70	0.84
受講してよかったか	4.36	4.44	0.79	0.73

受講者のうち誰がどのように回答したかが授業担当者（教員）にわかる記名式の方が教員の目を意識した回答になりやすい分、無記名式よりも評定平均値は高めに出やすいと考えるのが自然であろう。しかし、2014 年度の経済学 I の授業アンケートでは、回答数や質問内容等に違いがあるとはいえ、記名式と無記名式の間で評定平均値に大差はないという結果になり、「話し方・発声の明瞭さ」や「受講してよかったか」ではむしろ無記名式の評定平均値が記名式よりも高くなった。

自由記述欄については無記名式の記入件数 405 件（全回答数に占める割合は 59.9%）に対して記名式では 42 件（同 10.3%）にとどま

った（いずれも「特になし」「ありません」といった類の記入は勘定していない）。記名式と無記名式の間で自由記述欄の記入結果に大きな違いが生じた理由としては、①無記名式では単に改善意見や改善要望だけでなく感想も記入するよう呼びかけているのに対して、記名式では改善意見や改善要望のみを入力する問題設定になっていること（もちろん、記名式で改善意見や改善要望を記入しなかった受講者の全てが意見や要望を持っていないわけではないであろう）、②無記名式のアンケートでは最終回の授業教室で鉛筆やペンで紙に回答するが、記名式のアンケートでは携帯電話やスマートフォンでキー入力することになり、その回答も授業教室で授業中に行われるとは限らないこと、③記名式のアンケートでは自分が何を書いたかが授業担当者にはっきりとわかるため、意見や感想を書きにくいことが挙げられよう。

ただし、2013年度の携帯電話等による授業アンケートは無記名式で実施されながら、経済学Ⅰの自由記述欄への記入件数は31件で全回答数（298件、回答率34.6%）に占める割合は10.4%であり、2014年度とほぼ同じであった。このことを踏まえると、2014年度の経済学Ⅰの授業アンケートにおいて記名式と

無記名式の間で自由記述欄への記入件数に大きな差が生じたのは、記名式か無記名式かの違いよりも質問の仕方の違い（改善意見・要望のみを記入させるのかどうか）や回答記入方法の違い（携帯電話等でのキー入力によるのか配布用紙への手書きによるのか）によるところが大きいのではないかと推測される。

4. 経済学Ⅰ授業アンケート結果 15年間の推移

4.1 15年間通しでみた評定平均値の質問項目間比較

経済学Ⅰの2000年度から2014年度までの15年間を通した評定平均値（表4-1）を問1～16の全質問項目間で比較してみると、評定平均値が最も高いのは各年度問8「教員の声や発声」であり、その次は2000・2004～2007年度が問9「黒板の図・文字」、2001・2002・2010年度が問10「授業に対する熱意」、2003年度が問12「勉学する雰囲気」、2008・2009・2012・2014年度が問6「シラバスに沿った内容か」、2011・2013年度が問11「受講してよかったか」であった。

一方、評定平均値が最も低いのは2000～2003年度が問3「意欲的に取り組む」、2004・

表4-1 経済学Ⅰ授業アンケート 2000～2014年度の評定平均値

質問項目	2000 (N=193)	2001 (N=303)	2002 (N=376)	2003 (N=365)	2004 (N=546)	2005 (N=581)	2006 (N=451)	2007 (N=429)	2008 (N=337)	2009 (N=424)	2010 (N=483)	2011 (N=511)	2012 (N=557)	2013 (N=714)	2014 (N=676)	15年間の 平均値
問1 進め方・到達目標の説明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.48	4.39	4.40	4.48	4.39	4.43
問2 出席状況	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.43	4.41	4.49	4.47	4.33	4.43
問3 意欲的に取り組む	(2.63)	(2.87)	(2.77)	(3.37)	[4.22]	[4.13]	[4.04]	[3.76]	[3.87]	[3.87]	4.16	4.12	4.11	4.14	3.98	3.74
問4 授業の内容理解	3.29	3.35	3.29	3.69	3.86	3.74	3.76	3.45	3.62	3.64	3.97	3.96	3.97	3.95	3.80	3.69
問5 到達目標達成	—	—	—	—	3.86	3.81	3.57	3.56	3.67	3.63	3.96	3.89	3.93	3.96	3.80	3.78
問6 シラバスに沿った内容か	—	—	—	—	4.55	4.52	4.43	4.24	4.30	4.34	4.44	4.44	4.50	4.53	4.50	4.44
問7 学生の理解度への配慮	(3.87)	(3.95)	(3.77)	(4.06)	4.18	4.17	4.08	3.75	3.82	3.92	4.34	4.26	4.34	4.38	4.24	4.08
問8 教員の声や発声	4.48	4.33	4.48	4.63	4.66	4.62	4.55	4.37	4.36	4.42	4.58	4.62	4.62	4.69	4.61	4.53
問9 黒板の図・文字	(4.40)	(4.19)	(4.27)	(4.56)	[4.57]	[4.59]	[4.45]	[4.25]	[4.18]	[4.27]	4.45	4.32	4.35	4.53	4.36	4.38
問10 授業に対する熱意	(4.27)	(4.29)	(4.31)	(4.55)	—	—	—	—	—	—	4.51	4.41	4.48	4.50	4.39	4.41
問11 受講してよかったか	(3.69)	(3.83)	(3.62)	(3.99)	4.25	4.22	4.15	3.86	4.05	4.09	4.48	4.46	4.49	4.55	4.44	4.14
問12 勉学する雰囲気	(4.27)	(4.22)	(4.23)	(4.58)	4.50	4.31	4.26	3.91	3.74	3.82	3.81	3.91	4.00	4.07	3.99	4.11
問13 授業で興味が増したか	(3.42)	(3.53)	(3.46)	(3.77)	4.00	3.92	3.82	3.44	3.70	3.69	4.09	4.01	4.08	4.13	3.94	3.80
問14 将来役立つか	—	—	—	—	4.23	4.14	4.02	3.75	3.85	3.91	4.18	4.08	4.14	4.25	4.12	4.06
問15 配布資料	3.96	3.98	3.92	4.21	4.23	4.27	4.11	3.87	4.03	4.02	4.10	4.23	4.27	4.35	4.23	4.12
問16 総合評価	3.91	4.04	3.93	4.22	4.37	4.29	4.21	3.96	4.07	4.13	4.35	4.36	4.37	4.45	4.34	4.20

(注)問2、3、7、9～13は2009年度以前の質問文が2014年度以降と若干異なるため、参考として2000～03年度については()を付けて、また04～09年度については[]を付けて示した。

2006・2009・2011・2012年度が問5「到達目標達成」、2005・2008・2013・2014年度が問4「授業の内容理解」、2007年度が問13「授業で興味が増したか」、2010年度が問12「勉学をする雰囲気」であった。2番目に評定平均値が低い質問項目は、2000～2004・2006・2007・2009・2012年度が問4「授業の内容理解」、2005・2008・2010・2013・2014年度が問5「到達目標達成」、2011年度が問12「勉学をする雰囲気」であった。

問11「受講してよかったか」と問16「総合評価」の2つの評定平均値に注目すると2009年度までは一貫して「総合評価」が「受講してよかったか」を上回っていたが、2010年度以降はこれが逆転して「受講してよかったか」が「総合評価」を上回っている。この理由については推測の域を出ないが、「勉学する雰囲気」の低迷が2010年度以降の総合評価を引き下げる形で作用している可能性がある。

評定平均値の2000年度～2014年度における15年間の平均値を見ると、問8「教員の声や発声」が4.53で最も高く、問6「シラバスに沿った内容か」の4.44がこれに続く。2010年度からのデータしかない問1・2を除くと、以下、問10「授業に対する熱意」(4.41)、問9「黒板の図・文字」(4.38)の順となる。反対に評定平均値の15年間の平均値が最も低いのは問4「授業の内容理解」の3.69であり、これに問3「意欲的に取り組む」(3.74)、問5「到達目標達成」(3.78)、問13「授業で興味が増したか」(3.80)が続いた。

この15年間の経済学Ⅰに対する授業評価を総括すると、授業技術の基本の1つである声の明瞭さでは安定的に評価を得ているものの、受講者の理解度を高めることや、興味を喚起する点においては相対的に不十分で課題が残るということができよう。

4.2 15年間の評定平均値の推移

(1)概観

次に経済学Ⅰ授業アンケート結果15年間の評定平均値の推移を見ておこう(表4-1)。各質問項目とも2000年度から2004年度までは概ね上昇しているが、2004年度にピークを迎え、2005年度から2007年度までは低下し

た。2008、2009年度については大半の質問項目で横這いしないしやや上昇となった。そして、2010年度については問12「勉学をする雰囲気」を除く質問項目で2009年度と比べ評定平均値は0.08～0.42ポイント上昇した。2011年度以降はわずかに上昇もしくは低下する微変動・横這い傾向で推移したが、直近の2014年度は全質問項目で評定平均値が2013年度より低下し、また全16項目中12の質問項目で2010年度の評定平均値を下回った。

(2)2000～2009年度の評定平均値の推移

2000～2009年度の10年間の授業アンケート結果の考察を行った前稿では、2004年度と2007年度が経済学Ⅰに対する授業評価の転換点であると考え、①2000～2004年度を「初期効果」による改善の期間、②2005～2007年度を「初期効果」の剥落と「受講者の変容」への未対応による悪化の期間、③2008・2009年度を持ち直しと言えるかどうか微妙な期間と分析した。詳細は前稿に譲るが、その概要を以下にまとめ、参考までに各期間の評定平均値の変化幅を表4-2に示しておく。

表4-2 経済学Ⅰ授業アンケートの評定平均値の変化幅

質問項目	2000-2004	2004-2007	2007-2009	2009-2010	2010-2014
問1 進め方・到達目標の説明	-	-	-	-	-0.09
問2 出席状況	-	-	-	-	-0.11
問3 意欲的に取り組む	(1.59)	-0.46	0.12	0.28	-0.18
問4 授業の内容理解	0.57	-0.41	0.18	0.33	-0.17
問5 到達目標達成	-	-0.30	0.07	0.33	-0.16
問6 シラバスに沿った内容か	-	-0.30	0.09	0.11	0.06
問7 学生の理解度への配慮	(0.31)	-0.43	0.17	0.43	-0.11
問8 教員の声や発声	0.18	-0.28	0.05	0.16	0.03
問9 黒板の図・文字	(0.17)	-0.32	0.02	0.18	-0.09
問10 授業に対する熱意	-	-	-	-	-0.12
問11 受講してよかったか	(0.56)	-0.39	0.22	0.39	-0.04
問12 勉学する雰囲気	(0.23)	-0.59	-0.09	-0.01	0.18
問13 授業で興味が増したか	(0.58)	-0.56	0.25	0.40	-0.15
問14 将来役立つか	-	-0.47	0.16	0.28	-0.07
問15 配布資料	0.27	-0.36	0.15	0.08	0.13
問16 総合評価	0.46	-0.41	0.17	0.22	0.00

まず、2000年度は多くの項目で評定平均値が4を切っており、総じて低い地点からのスタートとなった分、2001年度から2004年度までは結果が改善していくことになった。こ

れは全く手つかずのところから始まった分、授業改善の余地が大きく、わずかな授業改善（小さな努力）を積み重ねるだけでも評価の上昇に繋がりやすい「初期効果」とも呼ぶべきものが働いたためと考えられる。

また、手を付けやすいところから授業の改善を始めていった結果、2005～2007年度は次第に授業改善を行う余地が小さくなっていったという「初期効果」の剥落と授業そのもののマンネリ化に加え、受講者の質的変容が徐々に進行していることに対して十分な対応をしなかったことが評定平均値の大幅悪化を招いた主因になったと考えられる。

授業内容の一部削減、配布資料の図表にその特徴を示すコメントを入れるなど、受講者の変容に合わせた現実的対応をある程度行った結果、2008・2009年度は一部質問項目を除けばわずかながらではあるが評定平均値が改善することになった。ただし、受講者の受講態度の悪化に歯止めが掛かったとは言い難い結果になっており、経済学Ⅰに対する全体の授業評価が持ち直していると断言できるかどうかは微妙であった。

(3)2010～2014 年度—「授業内容一新効果」とその一巡

表4-2に見る通り、2010年度の評定平均値は2009年度と比べ問7「学生の理解度への配慮」が0.43ポイント、問13「授業で興味が増したか」が0.40ポイント、問11「受講してよかったか」が0.39ポイントといずれも大幅に改善した。この他、問4「授業の内容理解」、問5「到達目標達成」、問3「意欲的に取り組む」、問14「将来役立つか」も0.3ポイント前後の改善となり、また、問4、問5、問7、問11、問13は過去最高の値を記録した。

2010年度は授業内容を2009年度までと大きく変えた（表1-1、1-2参照）。同時に授業の進め方も少し変え（一話完結型とし、最後の10分間にその日の理解度を確認する）、成績評価も平常点重視に見直した。2010年度の評定平均値は2009年度に比べ改善したが、この原因を授業内容や授業の進め方、評価方法を大幅に変更した以外の要因に求めるのは困難である。2010年度に授業内容等を見直し

たことによる「授業内容一新効果」とも呼ぶべきものが働いたとみてまず間違いなからう。ただし、問12「勉学をする雰囲気」だけは0.01ポイントの悪化となり、引き続き私語対策が課題として残ることになった。

2005年度以降凋落傾向にあった評定平均値はこのように授業内容等の変更により2010年度に改善したが、2011年度以降の推移を見るとこの「授業内容一新効果」は早くも一巡した感がある。すなわち2011年度は問12「勉学をする雰囲気」と問15「配布資料」を除き評定平均値が2010年度よりやや低下もしくは横這いという結果になり、その傾向は2012年度も続き、全体的に受講者からの授業評価は頭打ちとなった。

2013年度も問7「学生の理解度への配慮」、問8「教員の声や発声」、問11「受講してよかったか」、問13「授業で興味が増したか」、問14「将来役立つか」、問15「配布資料」、問16「総合評価」の評定平均値が過去最高の値を示す一方で、全体的には横這いしないしは緩やかな改善という結果にとどまった。そして、直近の2014年度は一転して全質問項目の評定平均値が2013年度を下回る結果となり、表4-2で問6、問8、問12、問15、問16を除く全ての質問項目で2010年度からの変化幅がマイナスになっていることが示されている通り、多くの質問項目の評定平均値が2010年度より悪化するという結果に終わった。

ただ、2014年度の評定平均値が2010年度より悪化してはいるものの依然として2006～2009年度の評定平均値よりは高い値を保っており、「授業内容一新効果」は一巡した感があるものの効果そのものが剥落した訳ではないと言えよう。

4.3 15年間における標準偏差の推移

表4-3はこの15年間における経済学Ⅰ授業アンケート結果の標準偏差の推移である。回答のばらつきを示す標準偏差は15年間を通して見てみると、まずアンケート開始直後の2000年度から2004年度にかけては一部質問項目で一時的に上昇するものもあったが、総じて低下する方向で推移した。2005年度から2007年度にかけては次第に上昇し、2008

年度、2009年度と高止まりした。しかし、2009年度から2010年度にかけて再び標準偏差は低下し、2011年度以降は総じて横這いないしはやや低下で推移している。評定平均値のピークとなった2004年度では5段階評定の4や5に回答が多く分布することになったのに対して、評定平均値のボトムとなった2007年度では評価がバラバラになり、2010年度はまた4や5に回答が多く集まることになったと解釈していいだろう。

2010年度以降の標準偏差の動きを見てみると、授業内容等を一新した2010年度は全質問項目で標準偏差が2009年度より低下した。特に問7「学生の理解度への配慮」、問11「受講してよかったか」、問13「授業で興味が増したか」は0.2ポイント以上の低下となった。これらはいずれも先に4.2(3)で見た通り2010年度に評定平均値が改善した質問項目であり、評価のばらつきが小さくなることが評定平均値の改善にそのまま結びついていることを示す。一方で、2009年度から2010年度にかけて評定平均値がほとんど変わらなかった問12「勉強する雰囲気」は標準偏差の低下幅も0.05ポイントにとどまり、教室内の秩序維持は2010年度も引き続き課題となった。

2010年度から2014年度にかけては総じて標準偏差は横這いないしはやや低下で推移しているが、2014年度は問12「勉強する雰囲気」と問16「総合評価」が2010年度と比べて0.14ポイント低下しているのが目立つ。こうした中で問2「出席状況」、問7「学生の理解度への配慮」、問9「黒板の図・文字」は2010年度から2014年度にかけて逆に標準偏差が僅かではあるが上昇した。

4.4 15年間における自由記述の推移

経済学Ⅰの授業アンケートにおける自由記述欄への記入件数とそのアンケート全回答数に占める割合の推移を表4-4にまとめた。自由記述欄への記入件数の全回答数に占める割合は2000年度から2003年度までは10%台で推移していたが、2004年度に29.1%まで上がり、更に2005年度は42.7%に急上昇した。2006年度以降は毎年度50%を超える水準で推移しているが、その中でも2012年度は73.2%に達し、足元の2014年度も59.9%となった。経済学Ⅰの授業アンケートでは、2006年度以降最終回授業の受講者の半数以上による自由記述欄への記入が定着している。

表4-3 経済学Ⅰ授業アンケート2000～2014年度の標準偏差

質問項目	2000 (N=193)	2001 (N=303)	2002 (N=376)	2003 (N=365)	2004 (N=546)	2005 (N=581)	2006 (N=451)	2007 (N=429)	2008 (N=337)	2009 (N=424)	2010 (N=483)	2011 (N=511)	2012 (N=557)	2013 (N=714)	2014 (N=676)
問1 進め方・到達目標の説明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.65	0.69	0.67	0.58	0.65
問2 出席状況	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.68	0.69	0.67	0.67	0.74
問3 意欲的に取り組む	(0.93)	(0.95)	(0.88)	(0.88)	0.78	0.80	0.78	0.96	0.84	0.88	0.82	0.73	0.75	0.75	0.76
問4 授業の内容理解	0.82	0.87	0.83	0.71	0.73	0.81	0.77	0.91	0.84	0.85	0.77	0.76	0.74	0.73	0.71
問5 到達目標達成	—	—	—	—	0.99	0.99	0.99	0.95	0.89	0.88	0.82	0.74	0.77	0.76	0.73
問6 シラバスに沿った内容か	—	—	—	—	0.71	0.70	0.80	0.85	0.74	0.80	0.73	0.70	0.68	0.68	0.67
問7 学生の理解度への配慮	(0.91)	(0.99)	(0.99)	(0.90)	0.77	0.77	0.86	0.90	0.88	0.90	0.68	0.72	0.74	0.69	0.72
問8 教員の声や発声	0.68	0.83	0.80	0.62	0.57	0.60	0.70	0.82	0.85	0.81	0.70	0.68	0.65	0.55	0.63
問9 黒板の図・文字	0.78	0.85	0.95	0.65	0.68	0.64	0.73	0.90	0.89	0.90	0.81	0.83	0.88	0.73	0.84
問10 授業に対する熱意					—	—	—	—	—	—	0.73	0.75	0.72	0.68	0.73
問11 受講してよかったか	(0.86)	(0.85)	(0.95)	(0.65)	0.80	0.80	0.87	1.01	0.87	0.94	0.74	0.77	0.68	0.62	0.73
問12 勉強する雰囲気	(0.82)	(0.83)	(0.80)	(0.62)	0.66	0.71	0.79	0.97	0.91	1.02	0.97	0.90	0.96	0.87	0.83
問13 授業で興味が増したか	(1.03)	(0.99)	(0.99)	(0.90)	0.86	0.86	0.90	1.03	0.92	1.08	0.88	0.90	0.85	0.80	0.88
問14 将来役立つか	—	—	—	—	0.78	0.82	0.83	0.97	0.91	0.96	0.82	0.84	0.83	0.75	0.82
問15 配布資料	0.85	0.87	0.90	0.78	0.79	0.77	0.85	0.96	0.78	0.90	0.84	0.77	0.80	0.77	0.75
問16 総合評価	0.78	0.80	0.81	0.75	0.72	0.77	0.82	0.89	0.81	0.86	0.80	0.67	0.71	0.66	0.66

(注)問2、3、7、9～13は2009年度以前の質問文が2014年度以降と若干異なるため、参考として2000～03年度については()を付けて、また04～09年度については[]を付けて示した。

表 4-4 経済学 I 授業アンケート 2000～2014 年度における自由記述欄への記入件数

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
自由記述欄記入件数①	35	54	73	53	159	248	229	230	174	240	285	292	408	399	405
回答数②	193	303	376	365	546	581	451	429	337	424	483	511	557	714	676
割合(=①/②、%)	18.1	17.8	19.4	14.5	29.1	42.7	50.8	53.6	51.6	56.6	59.0	57.1	73.2	55.9	59.9
(参考)履修者数	379	516	609	539	782	880	680	621	529	643	629	714	698	861	842

表 4-5 経済学 I 授業アンケート 2000～2014 年度における自由記述の分類 (件数)

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2000～14
成績評価方法	3	2	0	0	0	3	0	9	2	2	3	3	1	0	1	29
定期試験	1	1	2	3	5	1	3	2	1	0	0	0	2	2	2	25
レポート	3	3	13	4	16	25	16	23	9	8	0	1	0	4	2	127
授業中の得点・平常点・理解度チェック	1	5	4	4	2	3	3	1	4	4	2	4	7	5	7	56
板書の量・字・見やすさ・チョーク	10	4	16	3	7	12	5	7	10	6	7	13	22	24	58	204
配布資料の量・見やすさ・説明	0	4	3	5	9	36	18	12	7	15	3	1	19	17	21	170
声の大きさ・聞き取りやすさ・マイク	0	1	0	0	1	3	0	7	2	0	5	4	8	3	3	37
授業の進め方	2	6	6	4	9	10	7	11	12	4	8	24	28	34	39	204
私語	1	0	0	1	1	2	0	5	4	3	36	42	54	31	28	208
授業中の出入り・遅刻・受講態度	0	0	0	0	0	2	1	0	0	1	6	14	5	12	6	47
授業内容への要望・意見	4	5	6	3	9	14	13	15	21	19	29	30	41	44	31	284
教室・クラスサイズ・座席	1	0	1	1	0	9	2	1	0	5	27	26	48	41	19	181
時間割・授業日程	2	1	0	0	0	4	0	1	3	3	3	2	4	0	1	24
空調	1	0	5	2	0	1	2	2	0	2	0	3	2	2	1	23
受講者自身の反省・単位懇願	0	0	2	1	1	1	8	4	0	0	5	4	4	1	3	34
担当者の言動・口調への苦情	3	2	3	1	20	9	13	40	26	26	8	3	6	7	23	190
担当者について(性格・雑談・趣味・質問)	0	1	3	5	13	26	51	13	26	82	45	29	35	33	54	416
意味不明・AA・その他	1	1	0	2	3	5	12	15	11	14	6	6	8	2	2	88
授業全般への好意的感想・謝辞	2	18	9	14	63	82	75	61	36	46	92	83	114	137	104	936
合計	35	54	73	53	159	248	229	229	174	240	285	292	408	399	405	3283

表 4-6 経済学 I 授業アンケート 2000～2014 年度における自由記述の分類 (構成比、%)

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2000～14
成績評価方法	8.6	3.7	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	3.9	1.1	0.8	1.1	1.0	0.2	0.0	0.2	0.9
定期試験	2.9	1.9	2.7	5.7	3.1	0.4	1.3	0.9	0.6	0.0	0.0	0.0	0.5	0.5	0.5	0.8
レポート	8.6	5.6	17.8	7.5	10.1	10.1	7.0	10.0	5.2	3.3	0.0	0.3	0.0	1.0	0.5	3.9
授業中の得点・平常点・理解度チェック	2.9	9.3	5.5	7.5	1.3	1.2	1.3	0.4	2.3	1.7	0.7	1.4	1.7	1.3	1.7	1.7
板書の量・字・見やすさ・チョーク	28.6	7.4	21.9	5.7	4.4	4.8	2.2	3.1	5.7	2.5	2.5	4.5	5.4	6.0	14.3	6.2
配布資料の量・見やすさ・説明	0.0	7.4	4.1	9.4	5.7	14.5	7.9	5.2	4.0	6.3	1.1	0.3	4.7	4.3	5.2	5.2
声の大きさ・聞き取りやすさ・マイク	0.0	1.9	0.0	0.0	0.6	1.2	0.0	3.1	1.1	0.0	1.8	1.4	2.0	0.8	0.7	1.1
授業の進め方	5.7	11.1	8.2	7.5	5.7	4.0	3.1	4.8	6.9	1.7	2.8	8.2	6.9	8.5	9.6	6.2
私語	2.9	0.0	0.0	1.9	0.6	0.8	0.0	2.2	2.3	1.3	12.6	14.4	13.2	7.8	6.9	6.3
授業中の出入り・遅刻・受講態度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.4	0.0	0.0	0.4	2.1	4.8	1.2	3.0	1.5	1.4
授業内容への要望・意見	11.4	9.3	8.2	5.7	5.7	5.6	5.7	6.6	12.1	7.9	10.2	10.3	10.0	11.0	7.7	8.7
教室・クラスサイズ・座席	2.9	0.0	1.4	1.9	0.0	3.6	0.9	0.4	0.0	2.1	9.5	8.9	11.8	10.3	4.7	5.5
時間割・授業日程	5.7	1.9	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	0.4	1.7	1.3	1.1	0.7	1.0	0.0	0.2	0.7
空調	2.9	0.0	6.8	3.8	0.0	0.4	0.9	0.9	0.0	0.8	0.0	1.0	0.5	0.5	0.2	0.7
受講者自身の反省・単位懇願	0.0	0.0	2.7	1.9	0.6	0.4	3.5	1.7	0.0	0.0	1.8	1.4	1.0	0.3	0.7	1.0
担当者の言動・口調への苦情	8.6	3.7	4.1	1.9	12.6	3.6	5.7	17.5	14.9	10.8	2.8	1.0	1.5	1.8	5.7	5.8
担当者について(性格・雑談・趣味・質問)	0.0	1.9	4.1	9.4	8.2	10.5	22.3	5.7	14.9	34.2	15.8	9.9	8.6	8.3	13.3	12.7
意味不明・AA・その他	2.9	1.9	0.0	3.8	1.9	2.0	5.2	6.6	6.3	5.8	2.1	2.1	2.0	0.5	0.5	2.7
授業全般への好意的感想・謝辞	5.7	33.3	12.3	26.4	39.6	33.1	32.8	26.6	20.7	19.2	32.3	28.4	27.9	34.3	25.7	28.5
合計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

表 4-5 は 2000～2014 年度の自由記述の内容を大雑把に分類、整理したものであり、表 4-6 はその全体に占める構成比を示したものである。授業アンケート導入当初の 2000～2002 年度に関しては、板書に関する意見・要望が多かった。「板書の量が多い」、「板書を写す時間がもっと欲しい」という不満がそのほとんどである。一定の対応を取ったため、2003 年度以降は板書に関する意見・要望はさほど多く出ていなかったが、2011 年度から自由記述全体に占める板書に関する意見の割合が再び上昇し始め、特に直近の 2014 年度は 2.4 で述べた通り、板書に関する意見や要望の記入が 50 件を超え、全体の 14.3% を占めるに至った。

ただし、板書に関してはここ数年で悪筆に

なった、あるいは乱雑に書くようになったということは思い当たらない。着任当初から板書の書き方は変わらず、数年前から字をより大きく書くように心掛けており、この点はむしろ好意的に受け止められている。それだけに、苦情の増加は理解に苦しむところである。

レポートに関しては授業アンケート導入当初から「内容が難しい」、「字数制限をやめてほしい」といった意見や不満が毎年出ていたが、2008 年度からレポート提出用表紙に自由記述欄を設けたためか、授業アンケートの自由記述欄へのレポートに関する意見の記入は減った。更に 2010 年度からはそれまで 3 回だったレポートの提出回数を 1 回に減らしたこともあって、レポートに関する意見や不満の記入は一段と減少した。

配布資料に関しても 2010 年度の授業内容の一新に伴い、原則として 1 回の授業で 1 枚だけ配布することに変えたため、苦情が減ることになった。ただし、直近の 2014 年度については「配布資料を見やすくしてほしい」というような意見が数年前よりも増加した。

前稿でも指摘した通り、2004 年度以降は担当者に関する苦情や意見、感想の記述が多くなっており、自由記述欄への記入全体に占める割合が 20%を超える年度がほとんどとなり、2009 年度には 45%と半数近くを担当者に関する意見・感想・苦情が占めることとなった。しかし、これにも授業内容等の一新が影響したとみられ、2010 年度からは 10%台のウエイトにとどまっている（ただし、2014 年度は再びウエイトが 20%近くまで高まった）。自由記述欄で担当者と呼び捨てにする、あるいはお前呼ばわりする記入が 2007 年度以降散見されるようになり、担当者に強い不満を持つ受講者が増えていることを前稿で指摘したが、2010 年度以降は担当者に対する誹謗中傷の記述は全く見られなくなった。この点においても授業内容や進め方を 2010 年度に大きく変えたことが奏効したと推測される。

5. 評定平均値の 15 年間の推移に関する 1 つの分析

ここでは、経済学 I 授業アンケート結果の評定平均値 15 年間の推移について 1 つの分析を試みた。

5.1 評定平均値の安定的推移と傾向的変動期間

表 5-1 は各質問項目の 2000~2014 年度における評定平均値について、①15 年間の平均値、②15 年間の最大値、③15 年間の最小値、④最大値と最小値の差（＝②－③）、⑤15 年間の標準偏差を一覧表にしたものである。2010 年度以降しかデータがない問 1、問 2 と受講者の主体的取り組みを尋ねる問 3 を除いて考えると、15 年間の最大値と最小値の差は最も高い問 11「受講してよかったか」でも 0.93 であり、どの質問項目も 1 未満に収まってい

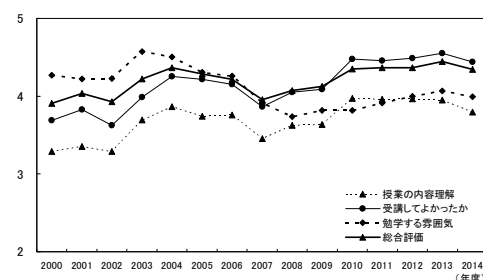
る。15 年間の評定平均値のばらつきを示す標準偏差を見ても「受講してよかったか」の 0.30 が最高であり、他の質問項目はいずれも 0.3 未満になっている。つまり経済学 I 授業アンケート結果の評定平均値はこの 15 年間安定的に推移していたことが確認できる。

表 5-1 経済学 I 授業アンケート結果 2000～2014 年度における評定平均値 15 年間の平均値・最大値・最小値・標準偏差

質問項目	15年間の平均値	15年間の最大値	15年間の最小値	最大値と最小値の差	15年間の標準偏差
問 1 進め方・到達目標の説明	4.43	4.48	4.39	0.09	0.05
問 2 出席状況	4.43	4.49	4.33	0.16	0.06
問 3 意欲的に取り組む	3.74	4.22	2.63	1.59	0.55
問 4 授業の内容理解	3.69	3.97	3.29	0.68	0.25
問 5 到達目標達成	3.78	3.96	3.56	0.40	0.15
問 6 シラバスに沿った内容か	4.44	4.55	4.24	0.30	0.10
問 7 学生の理解度への配慮	4.08	4.38	3.75	0.63	0.22
問 8 教員の声や発声	4.53	4.69	4.33	0.36	0.12
問 9 黒板の図・文字	4.38	4.59	4.18	0.40	0.14
問 10 授業に対する熱意	4.41	4.55	4.27	0.28	0.10
問 11 受講してよかったか	4.14	4.55	3.62	0.93	0.30
問 12 勉学する雰囲気	4.11	4.58	3.74	0.84	0.25
問 13 授業で興味が増したか	3.80	4.13	3.42	0.71	0.25
問 14 将来役立つか	4.06	4.25	3.75	0.50	0.16
問 15 配布資料	4.12	4.35	3.87	0.48	0.15
問 16 総合評価	4.20	4.45	3.91	0.54	0.18

因みに「授業の内容理解」、「受講してよかったか」、「勉学する雰囲気」、「総合評価」の 4 つの質問項目について、評定平均値の 15 年間の推移をグラフ化すると（図 5-1）、いずれも乱高下せず、安定的に推移していることがわかる。

図 5-1 2000～2014 年度における評定平均値の推移（4 つの質問項目）



ただし、評定平均値は安定的な推移を示しながらも、4.2 で見た通り、2000 年度から 2004

表 5-2 2002～2014 年度経済学 I 授業アンケートの評定平均値のクラス間格差

	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
授業の内容理解	0.41	0.30	0.36	0.20	0.25	0.24	0.23	0.23	0.15	0.31	0.14	0.06	0.14
受講してよかったか	0.20	0.21	0.22	0.12	0.28	0.65	0.23	0.39	0.16	0.17	0.15	0.17	0.18
勉強する雰囲気	0.34	0.17	0.17	0.18	0.20	0.74	0.37	0.36	0.41	0.56	0.33	0.29	0.16
総合評価	0.15	0.15	0.22	0.22	0.20	0.49	0.29	0.32	0.18	0.32	0.18	0.09	0.14

年度までは概ね上昇、2005 年度から 2007 年度までは低下、2008、2009 年度は横這いないしやや上昇、2010 年度にほとんどの質問項目で上昇し、2011 年度から 2014 年度までは微変動・横這いで推移していた。そのことは図 5-1 からも改めて確認することができる。このように経済学 I 授業アンケート結果の 15 年間における評定平均値は基本的には安定的に動きながらもその中で傾向的に変動する期間を有していた。

5.2 クラス間格差と学科・学年間における格差の考察

4.2 で見た評定平均値の長期的推移は筆者が担当した 4 クラスないしは 3 クラスのアンケート結果を合算したデータの動きである。ところが、全く同じ授業内容・進め方で授業を行っていながらも担当する曜日時限（クラス）によって結果に差が生じる。これが前稿で取扱ったクラス間格差の問題である。経済学 I の評定平均値が基本的には安定的に推移しながらも、その中で傾向的に変動する期間を有していたのはこのクラス間格差による。

前稿では昼間授業のみを担当するようになった 2002 年度以降について「受講態度」、「授業の内容理解」、「受講前に興味があったか」、「勉強する雰囲気」、「受講してよかったか」、「総合評価」の 6 項目の評定平均値のクラス間格差（最も高いクラスと最も低いクラスの間における評定平均値の差）を算出して分析を行った。それによると、2004 年度の時点ではクラス間格差は大きな値を取っていなかったが、2009 年度までの 10 年間で評定平均値が最低となった 2007 年度では「受講してよかったか」や「勉強する雰囲気」のクラス間格差が高い値になり、2009 年度までクラス間格差の拡大傾向が見られた。

2010 年度以降のクラス間格差についてはアンケートの質問項目が 2010 年度からいくつ

か変更になったため、「授業の内容理解」、「勉強する雰囲気」、「受講してよかったか」、「総合評価」の 4 つの質問項目を対象として見てみたい。

表 5-2 で確認できる通り、2010 年度のクラス間格差は「勉強する雰囲気」を除き 2009 年度に比べ縮小した。2011 年度はクラス間格差が再び拡大したが、2012 年度から 2014 年度については総じてクラス間格差は縮小傾向にある。特に 2014 年度はいずれの質問項目も 0.1 台となった¹¹⁾。

前稿では 2007 年度以降の「クラス間格差拡大」の原因として経済学 I の授業評価における学科間や学年間の格差の拡大を考えた。すなわち同じ授業であっても理解度や授業への関心は学科によって異なると考えられるが、学科間の格差が広がることで、理解度や関心の低い学科に所属する受講者が多い曜日時限（クラス）の授業評価が他の曜日時限に比べて低く出てしまう可能性を考え、2004・2007・2009 年度の「受講態度」、「授業の内容理解」、「受講前に興味があったか」、「勉強する雰囲気」、「受講してよかったか」、「総合評価」の 6 項目に関して①全学年合計でみた学科間の比較（学科間格差の算出）、②全学科合計でみた学年間の比較（学年間格差の算出）、③各学科を学年ごとに集計した学科学年間の比較（学科学年間格差の算出、ただしアンケート回答数が 10 件以上の学科学年が対象）を行った。そこで今回は 2010 年度以降について「授業の内容理解」、「勉強する雰囲気」、「受講してよかったか」、「総合評価」の 4 項目について学科間や学年間の格差を推計してみた。表 5-3 は 2004・2007・2009～2014 年度の評定平均値の学科間や学年間における格差である。

2010 年度から 2014 年度までのクラス間格差の動き（表 5-2）に学科間格差、学年間格差、学科学年間格差が影響を与えたか否か

について、表5-3を見て判断するのは難しいところがある。例えば「勉強する雰囲気」のクラス間格差は2010、2011年度と拡大し、2012年度以降縮小している(表5-2参照)。これに対して、学科間格差と学科学年間格差は2010、2011年度にともに縮小し、学科学年間格差は2012、2013年度に大きく拡大している。つまり、「勉強する雰囲気」のクラス間格差の拡大や縮小を学科間格差や学科学年間格差の変化で説明するのには無理がある。

表5-3 評定平均値の学科・学年の間における格差

	学科間格差							
	2004	2007	2009	2010	2011	2012	2013	2014
授業の内容理解	0.39	1.00	0.67	0.45	0.46	0.41	0.31	0.44
受講してよかったか	0.41	0.70	0.70	0.51	0.31	0.42	0.29	0.27
勉強する雰囲気	0.29	0.46	1.06	0.61	0.42	0.39	0.36	0.41
総合評価	0.50	0.52	0.67	0.37	0.47	0.37	0.26	0.22
	学年間格差							
	2004	2007	2009	2010	2011	2012	2013	2014
授業の内容理解	0.20	0.22	0.21	0.16	0.28	0.22	0.12	0.10
受講してよかったか	0.19	0.30	0.13	0.21	0.22	0.19	0.15	0.05
勉強する雰囲気	0.23	0.36	0.18	0.22	0.35	0.23	0.07	0.03
総合評価	0.17	0.25	0.20	0.13	0.16	0.15	0.07	0.12
	学科学年間格差							
	2004	2007	2009	2010	2011	2012	2013	2014
授業の内容理解	0.64	0.98	0.77	0.54	0.78	0.71	0.68	0.64
受講してよかったか	0.57	1.08	0.87	0.65	0.78	0.80	0.55	0.45
勉強する雰囲気	0.37	0.83	1.20	0.95	0.59	0.73	1.09	0.64
総合評価	0.71	0.73	0.80	0.73	0.70	0.54	0.53	0.32

しかし、「授業の内容理解」、「受講してよかったか」、「総合評価」については、2010年度は2009年度と比べ学科間格差は縮小し、学科学年間格差も縮小したため、クラス間格差の縮小に繋がったと言える。また、2010年度と比べて2011年度に「授業の内容理解」のクラス間格差が拡大したことは学科学年間格差の拡大と対応しており、更に「総合評価」のクラス間格差の拡大は学科間格差の拡大と対応している。

2012・2013年度の「勉強する雰囲気」を除けば、2010年度以降は学科間格差、学年間格差、学科学年間格差のいずれも総じて縮小傾向にあり、これがクラス間格差の縮小傾向に繋がり、ひいては評定平均値が2010年度にほとんどの質問項目で上昇し、2011年度以降は2014年度まで微変動・横這い傾向で推移したことに繋がったと思われる。

5.3 評定平均値の格差縮小の背景

それでは、クラス間格差や学科学年間格差が2010年度以降縮小傾向にある理由は何か。

以下ではこのことについて考えたい。これは2010年度から授業内容や進め方、評価方法を一新した「授業内容一新効果」と関係している。2009年度までの授業は経済指標の読み方を中心とするもので、ある程度体系的な内容となっていた(表1-2参照)。しかし、2004年度をピークに授業アンケートの評定平均値が凋落傾向に入り(表4-1参照)、経済学Ⅰの授業内容や進め方が、受講者の満足度や興味を刺激する力を徐々に失っていったと感じざるを得なかった。

そこで2009年度までの授業アンケート結果を踏まえ、体系的な経済理論の習得という点では難があるが、2010年度からの授業は一話完結型のアラカルト方式の授業に模様替えし、毎回の授業テーマは受講者が興味を持てるようできるだけ身近な事例を取り込むことにした(表1-1参照)。

一話完結型のアラカルト方式の授業は、受講者によって所属学科が異なり、基礎学力や関心がばらつきやすい共通科目では受講者に受け入れやすい面があったのではないと思われる。専門科目と異なり、共通科目は全学科からの受講となる。大阪工業大学工学部の10学科はデザイン系、エンジニア系、サイエンス系と学科によって系統が異なる。工学部の中には数学が好きな者もいれば、哲学的な内容を好む者もあり、また、社会的な問題に関心を持つ者もいれば、社会に出てから役立つ内容を求める者もいる。それぞれに得意分野や関心は分かれる。このため、全ての受講者の関心に合致する授業内容にするのは無理でも、アラカルト方式にしたことにより、多くの受講者にとって全15回授業のうち何回かは授業内容が自分の得意分野や関心と合致し、これが受講者の興味喚起にも寄与することになったとみられる。

また、体系的な内容で構成される積み重ね型授業では、たまたま数回欠席しただけで授業が全く理解できなくなって受講者が行き詰まるようなことも起こりがちである。しかし、一話完結型のアラカルト方式の授業では、数回程度の欠席によるそうした行き詰まりは見られにくい。これに加えて評価方法も2010年度からは、毎回出席票の裏面にその日の授業

内容に関する質問の解答を書かせる理解度チェック方式を採用したことにより、平常点重視となり、必然的に履修者の出席を促すことになった。こうした点が受講者の理解度の向上に繋がった面もあるだろう。

出席票の裏面は先にも述べた通り「ミニツペーパー」の役割も果たし、ここに受講者はその日の授業に対する感想や意見、要望を記入する。最終回に実施する授業アンケートが授業の「総括的評価」であるのに対して、出席票の裏面は授業の「形成的評価」に近いものである。受講者の要望や意見を次の授業で紹介してコメントし、対応可能なものについては取り込んだことが、授業に対する満足度の上昇に繋がったかもしれない。

ただし、アラカルト方式に切り替えた理由はこうした効果を狙ったためではなかった。1年次開講の「人文社会入門Ⅰ・Ⅱ」（2014年度より廃講）や「淀川と人間」で自分が担当した回での受講者の反応が比較的良好であったことを踏まえ、2年次以上で開講する「経済学Ⅰ・Ⅱ」もこうした科目の内容の延長に当たるものを行った方が良いという考えからである。「人文社会入門Ⅰ・Ⅱ」では全15回のうち7回もしくは8回の担当、「淀川と人間」は同じく2回の担当のため、体系的な内容の習得よりは受講者に経済学の基本的な概念や発想法に触れてもらうことに重点を置かざるを得ない。2010年度からは「人文社会入門Ⅰ・Ⅱ」や「淀川と人間」の延長線上にある内容であることをシラバスにも明記して開講した。結果的にこの内容一新が効果を発揮して、2010年度以降の評価が改善することになったと考えられる。出席票の裏面にその日の授業に関する質問や意見、感想、要望等を書かせるのも「人文社会入門Ⅰ・Ⅱ」、「淀川と人間」の担当回で実施していたことを経済学Ⅰの授業で踏襲したに過ぎない。

一方で、問12「勉学をする雰囲気」だけは2010年度以降も引き続き課題として残ることになった。授業内容や評価方法の一新はできても、受講者の質的変容に歯止めを掛けることはできない。平常点重視となった分、「平常点があるのでとりあえず授業に出席する」といった消極的な理由で授業に出席する受講

者を増やすことにも繋がり、教室の秩序回復が図れない原因にもなったとみられる。

なお、直近の2014年度の評価平均値が多くの質問項目で2010年度よりも下がった理由がクラス間格差や学科学年間格差などによる評価の悪化では無い以上、その原因を突き止める必要がある。しかし、現時点では低下の原因を特定できていない。

6. 授業アンケート継続の重要性 —結びにかえて

授業アンケートには自らの授業認識の機会提供と教育記録のツールとしての意義がある一方で、数字が一人歩きする危険性があることや評価の信頼性についても万全ではないことを前稿で指摘した。本稿では授業アンケートの意義を考える上で重要な「アンケートの継続性」について述べて、結びにかえたい。

全く同じ内容、進め方の授業でも曜日・時間（クラス）や学科、学年によって評価平均値に差が出るのであるから、授業アンケートの評価平均値を異なる科目間で比較することや、学科や学部あるいは大学全体の平均値と比較することは無意味である。もちろん、同一科目の時系列比較も一般教育系の科目においては毎年受講者の学科・学年構成が変わることを考えると、厳密にはデータの接続性に難がある。しかし、そのことを考慮に入れても、本稿で示した通り、授業内容や進め方あるいは評価方法を変えたことが受講者にどのように受け止められたかは授業アンケートを通して明確にわかる。これは過去の結果との比較によって初めて明らかになるのであり、授業アンケートの最大の意義は同一科目における時系列比較にあると筆者は考えている。

前稿では授業評価の凋落（評価平均値の低下）の背景としてクラス間格差や学科学年間格差の拡大を指摘し、これを受講者側の要因として捉えて授業担当者には如何ともし難いものという認識を示した。しかし、本稿で述べた通り2010年度からの授業内容や進め方の一新によりクラス間格差や学科学年間格差が縮小したことに鑑みると、その認識は正しくなかったと言わざるを得ない。

授業アンケートはこうした誤った認識を正すのにも役立つ。前稿でも述べた通り、筆者はFDという観点よりもむしろ教育記録を残すという考えから授業アンケートを継続して実施しているが、授業アンケート結果の継続的記録は自ずと授業のチェック機能を果たすことにもなるのである。

時系列比較をするためには同じ質問項目でアンケートを継続する必要があるのは言うまでもない。その意味で、金科玉条の如くアンケートの質問項目は変えることがあってはならないとまでは言わないが、質問項目を見直すのは慎重であるべきである。

直近の2014年度の経済学Ⅰ授業アンケートでは多くの質問項目で評定平均値が2010年度を下回った。2005年度から2007年度にかけて見られた受講者の（主観的な）理解度や満足度の低下が再び起こらないよう、今後も継続的に評定平均値をチェックし、自由記述欄の意見にも注意する必要がある。

そもそも現在の授業内容や進め方がいつまでも受講者に受け容れられる保証はない。授業アンケートを継続的に行うことで評定平均値などのデータを記録しておき、受講者からの評価の変化をすぐに汲み取れるようにしておかねばならない。

もちろん、授業アンケートは授業担当者にとって決して楽しいものではなく、できれば避けて通りたいものである。時間をかけて授業アンケート結果のプリントを作成していると、「自分で自分の首を絞めているのではないか」という思いが頭をよぎる。しかし、自分の教育記録を残し、授業が受講者から離れたものにならないようにするためには、授業アンケートを回避することはできず、継続せざるを得ない。愉快なものではなくてもその期の授業の総括的評価である最終回の授業アンケートを継続することによって、自分の授業を振り返る機会が得られる。それは受講者にとってより良い授業を展開していくことにも結びつく。本稿においても前稿の結びと同じく次の言葉で締め括りたい。授業アンケートについてもまさしく「継続は力なり」である。

〔注〕

- 1) 授業アンケートは大阪工業大学工学部で2000年度に試行的に導入されたが、以後2003年度まで任意実施となり、2004年度から原則全授業での実施となった。筆者担当の経済学Ⅰでは任意実施の期間も授業アンケートを継続した。後述する通り、2008年度から自己評価委員会のアンケート用紙で質問項目の大幅見直しが行われたが、アンケートの継続性を重視して2008・2009年度は独自に2007年度までと同じ質問項目で授業アンケートを実施した。また、先述の通り、2011年度から携帯電話等を使った授業アンケートが全学的に導入されたが、それとは別に紙による授業アンケートを2011年度以降も引き続き実施している。
- 2) 本稿を執筆するに当たって授業アンケートに関する多くの論考に目を通したが、執筆の上で直接引用した論考や立論の上で全面的あるいは部分的に依拠した論考はない。学生による授業評価について考える上で、興味深かった論考・書籍は次の4点である。
 - ①安岡高志「学生による授業評価の進展を探る」、『京都大学高等教育研究』、第13号、73-87頁、2007年
 - ②佐藤手織・松浦勉・小林繁吉・渡辺武秀・笹原徹「授業評価に影響を与える要因―特に「信頼性」をめぐる考え方について―」、『八戸工業大学異分野融合研究所紀要』、8号、61-78頁、2009年
 - ③東北大学高等教育開発推進センター編『学生による授業評価の現在』、東北大学出版会、2010年
 - ④三浦真琴「進化する授業評価～リファインの試み～」、『関西大学高等教育研究』、第3号、13-30頁、2012-13年
- 3) ただし、2014年度以降入学生からは、教育課程の変更により、哲学、倫理学、法学、経済学などの2年次以上で履修する人文社会系科目は、前期にⅠ、後期にⅡという開講ではなくなり、前期または後期の半期のみの開講となる。これにより2014年度以降入学生に関しては「経済学Ⅰ」（前期開講）、「経済学Ⅱ」（後期開講）としては開講されず、前期または後期に「経済学」として

のみ開講されることになる。また、2014 年度以降入学生からは「共通科目」に代わり「キャリア形成の基礎」というカテゴリーが設定され、人文社会系科目もこの中に入るようになった。

- 4) 2014 年度以降入学生からは卒業要件の 124 単位は変わらないものの、人文社会系科目の必要修得単位数は 10 単位に変更になった。
- 5) 定期試験、レポート等、平常点の () 内に付した配点は 2011 年度以降のものである。2010 年度は定期試験 (50 点)、レポート等 (30 点)、平常点 (70 点) の合計得点 (150 点満点) を 100 点満点に換算して最終成績としており、2011 年度以降と評価割合が異なっていた。なお、2009 年度までの成績評価は試験 (100 点満点) とレポート点 (3 回分を 50 点満点に換算) が中心であり、平常点に関しては授業中適宜こちらが出した質問に対して挙手して正答を述べた受講者に 10 点を与えるというやり方を採っていた。
- 6) 本学所定の出席票は縦が 84mm、横が 70mm のサイズ of 用紙であり、黄色、ピンク色、水色、緑色、柿色など何種類かの色に分かれて準備されている。表側に受講者の学科・学年、学生番号、氏名、授業科目名・担当者名、座席番号、受講年月日・時限を記入する欄があり、裏面は無地である。経済学Ⅰの授業では 2010 年度以降、授業開始数分前から各席を回って出席票を配布し、授業開始後は配布資料と一緒に教室前部ドア近くの小机の上に置いている。
- 7) 2009 年度までのアンケート用紙では、「出席状況」と「総合評価」以外の質問項目は 5「強くそう思う」、4「ややそう思う」、3「どちらとも言えない」、2「あまりそう思わない」、1「全くそう思わない」の 5 つの選択肢から該当するものを選択させていた。この点でも 2009 年度までと 2010 年度以降とではアンケート結果は厳密には接続しない。しかし、アンケート結果を見る限りではこの選択肢の違いが評定平均値の大きな差としては現れていないように思われる。

8) ただし、授業アンケート導入初年度の 2000 年度だけは、同年度後期開講の経済学Ⅱの第 1 回授業でアンケート結果プリントを配布した。

9) 2014 年度の学科学年別評定平均値の一覧表を巻末の〈参考 2〉に掲げた。

10) 携帯電話等を使った授業アンケートシステムでは、2011 年度後期から中盤に 1 回記名式によるアンケートが実施され、次の 2 つの設問に回答させるようになっていた。

設問 1 「これまでの授業において良かった点を記入してください」

設問 2 「今後の授業において改善してほしい点を記入してください」

しかし、2014 年度前期からはこの中盤の記名式による授業アンケートは廃止された。

11) ただし、2.2 の図 2-17 で見た通り、2014 年度は「黒板の図・文字」や「出席状況」、「意欲的に取り組む」、「学生の理解度への配慮」、「配布資料」などクラス間格差が 0.2 ポイント以上の質問項目もあった。

＜参考 1＞2014 年度経済学Ⅰ 授業アンケート用紙

経済学Ⅰ 授業アンケート

該当する番号(5～1)に○印をつけてください

紙による当授業アンケート(○をつける楽な回答方式)へのご協力をお願いします(教務課による「携帯電話を使った授業アンケートシステムC-Learning」とは異なり無記名方式です)。以下の質問について経済学Ⅰの全15回を通した評価を行って下さい。このアンケートは、当授業の現状を把握し授業改善に役立てるために2000年度から毎年実施しています。アンケート結果は定期試験の時にプリントにまとめて配布する予定です。自由記述欄に書いてあることも全て紹介し、担当者の簡単なコメントを付けるようにしますので、是非ご意見、ご感想を書いて頂きますよう、ご協力をお願いします。

	大変 そう 思う	そう 思う	どちら とも い え ない	そう 思 わ ない	ま っ た く そ う 思 わ ない
問 1 この授業の進め方や到達目標について説明がありましたか	5	4	3	2	1
問 2 この授業にどの程度出席しましたか (5:100% 4:80%～100%未満 3:60%～80%未満 2:40%～60%未満 1:40%未満)	5	4	3	2	1
問 3 この授業に意欲的に取り組みましたか	5	4	3	2	1
問 4 この授業の内容は十分理解できましたか	5	4	3	2	1
問 5 この授業の到達目標を達成できましたか	5	4	3	2	1
問 6 この授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか	5	4	3	2	1
問 7 この授業は学生の理解度を配慮しながら進められましたか	5	4	3	2	1
問 8 この授業の教員の声や発声は明瞭で、聞き取りやすかったですか	5	4	3	2	1
問 9 この授業で黒板やスクリーンの図や文字は見やすかったですか	5	4	3	2	1
問10 この授業の担当教員から授業に対する熱意を感じましたか	5	4	3	2	1
問11 総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか	5	4	3	2	1
問12 この授業では勉学をする雰囲気が保たれていましたか	5	4	3	2	1
問13 この授業により、この分野に対する興味が増えましたか	5	4	3	2	1
問14 この授業はあなたの将来に広い意味で役に立つと思いますか	5	4	3	2	1
問15 配布資料は教材として有益でしたか	5	4	3	2	1
問16 この授業の総合評価を5段階でして下さい (5が最も高く、1が最も低い)	5	4	3	2	1

この授業のよかった点もしくは改善すべき点は何ですか。なるべく具体的に記述して下さい。
また、この授業を良くするための意見や授業を受けての率直な感想など何でも自由に書いて下さい。(書ききれない時は裏に書いても可)

学科・学年を○で囲んで下さい。

学科 C V W A R M U E D K L 学年 1 2 3 4

※ご協力、ありがとうございました。

＜参考２＞2014 年度経済学Ⅰ 授業アンケート結果（学科学年別評定平均値）

	都市デザイン工学科				環境工学科				空間デザイン学科				建築学科			
	2年 (N=27)	3年 (N=20)	4年 (N=6)	全体 (N=55)	2年 (N=20)	3年 (N=23)	4年 (N=3)	全体 (N=49)	2年 (N=49)	3年 (N=23)	4年 (N=4)	全体 (N=81)	2年 (N=67)	3年 (N=28)	4年 (N=3)	全体 (N=105)
問 1 進め方・到達目標の説明	4.26	4.55	4.50	4.38	4.58	4.48	4.67	4.52	4.47	4.43	4.25	4.44	4.35	4.43	4.67	4.35
問 2 出席状況	4.37	4.40	3.83	4.31	4.60	4.70	4.33	4.57	4.10	4.00	3.25	4.02	3.94	4.14	3.67	3.97
問 3 意欲的に取り組む	4.04	3.95	4.17	4.02	4.20	3.87	4.33	4.04	4.20	4.09	4.00	4.15	3.71	3.93	3.33	3.73
問 4 授業の内容理解	3.78	3.85	3.83	3.82	3.85	3.83	3.67	3.82	3.96	3.78	3.50	3.89	3.49	3.86	3.33	3.59
問 5 到達目標達成	3.78	3.80	3.83	3.82	4.15	3.83	3.67	3.90	3.84	3.78	3.50	3.85	3.52	3.79	3.33	3.58
問 6 シラバスに沿った内容か	4.48	4.50	4.50	4.49	4.53	4.52	5.00	4.50	4.59	4.35	3.75	4.49	4.55	4.54	4.67	4.49
問 7 学生の理解度への配慮	4.33	4.25	4.67	4.35	4.20	4.13	5.00	4.20	4.45	4.22	4.25	4.37	4.21	4.18	4.33	4.18
問 8 教員の声や言葉	4.44	4.55	4.67	4.51	4.65	4.61	5.00	4.59	4.78	4.61	4.25	4.70	4.61	4.68	4.67	4.59
問 9 黒板の図・文字	4.37	4.70	4.50	4.49	4.50	4.17	4.33	4.29	4.47	4.30	4.25	4.43	4.14	4.32	4.67	4.18
問10 授業に対する熱意	4.15	4.50	4.50	4.31	4.25	4.30	4.67	4.29	4.53	4.39	4.00	4.48	4.27	4.43	4.00	4.28
問11 受講してよかったか	4.46	4.65	4.50	4.52	4.50	4.30	4.33	4.35	4.53	4.48	3.75	4.48	4.36	4.43	4.33	4.33
問12 勉学する雰囲気	4.00	4.05	4.00	4.00	3.95	3.74	4.33	3.86	4.16	3.86	3.50	4.05	4.09	4.25	3.67	4.10
問13 授業で興味が増したか	3.81	3.80	4.17	3.84	4.15	3.74	4.67	3.92	3.91	4.04	3.25	3.95	3.75	3.93	3.33	3.76
問14 将来役立つか	4.00	4.05	4.33	4.05	4.25	4.13	4.00	4.16	4.13	4.00	3.50	4.05	4.09	4.21	4.00	4.10
問15 配布資料	4.22	4.35	4.33	4.27	4.25	4.13	4.67	4.22	4.33	4.13	3.00	4.20	4.07	4.50	4.00	4.16
問16 総合評価	4.30	4.50	4.50	4.38	4.45	4.26	4.33	4.37	4.40	4.52	4.25	4.44	4.22	4.39	3.67	4.23
	ロボット工学科				機械工学科				生命工学科				電気電子システム学科			
	2年 (N=33)	3年 (N=21)	4年 (N=2)	全体 (N=59)	2年 (N=5)	3年 (N=22)	4年 (N=2)	全体 (N=29)	2年 (N=39)	3年 (N=14)	4年 (N=3)	全体 (N=56)	2年 (N=23)	3年 (N=13)	4年 (N=2)	全体 (N=42)
問 1 進め方・到達目標の説明	4.30	4.38	4.50	4.34	4.60	4.32	4.00	4.34	4.54	4.57	4.67	4.55	4.43	4.31	4.00	4.36
問 2 出席状況	4.64	4.29	4.50	4.47	4.40	4.55	5.00	4.55	4.51	4.79	3.33	4.52	4.61	4.62	3.50	4.52
問 3 意欲的に取り組む	4.06	4.00	5.00	4.07	4.20	3.82	5.00	3.97	4.08	4.14	4.00	4.09	3.91	4.00	3.50	3.90
問 4 授業の内容理解	3.97	4.05	4.50	4.03	3.80	3.82	3.50	3.79	3.92	3.79	4.00	3.89	3.43	4.08	3.50	3.62
問 5 到達目標達成	3.79	4.00	4.50	3.92	4.00	3.82	3.50	3.83	3.90	4.14	3.67	3.95	3.48	4.00	3.00	3.64
問 6 シラバスに沿った内容か	4.48	4.48	5.00	4.49	4.80	4.59	5.00	4.66	4.56	4.71	5.00	4.63	4.65	4.46	4.00	4.55
問 7 学生の理解度への配慮	4.39	4.24	4.00	4.32	4.60	3.95	4.50	4.10	4.31	4.36	4.67	4.34	4.13	4.15	4.00	4.17
問 8 教員の声や言葉	4.61	4.71	5.00	4.64	4.60	4.73	5.00	4.72	4.67	4.71	5.00	4.70	4.70	4.54	5.00	4.69
問 9 黒板の図・文字	4.67	4.38	4.50	4.54	4.00	4.41	5.00	4.38	4.62	4.50	4.67	4.59	4.39	4.46	4.00	4.43
問10 授業に対する熱意	4.39	4.52	4.50	4.46	4.60	4.27	5.00	4.38	4.51	4.36	5.00	4.50	4.61	4.15	5.00	4.45
問11 受講してよかったか	4.52	4.48	5.00	4.51	4.60	4.41	4.50	4.45	4.62	4.50	5.00	4.61	4.43	4.23	4.50	4.36
問12 勉学する雰囲気	3.94	3.95	3.50	3.93	4.60	3.73	4.50	3.93	4.18	4.36	5.00	4.27	3.91	3.92	3.00	3.86
問13 授業で興味が増したか	3.94	3.95	4.50	3.98	4.20	4.24	4.00	4.21	3.87	4.00	4.33	3.93	4.17	3.77	4.00	4.02
問14 将来役立つか	4.03	4.24	4.50	4.14	4.40	4.27	3.50	4.24	4.26	3.79	4.67	4.16	4.39	4.00	4.00	4.21
問15 配布資料	4.30	4.14	3.50	4.22	4.00	4.41	4.50	4.34	4.38	4.21	5.00	4.38	4.39	4.00	4.50	4.26
問16 総合評価	4.30	4.33	5.00	4.32	4.60	4.27	4.50	4.34	4.44	4.36	5.00	4.45	4.43	4.23	4.00	4.33
	電子情報通信工学科				応用化学科				工学部(10学科合計)							
	2年 (N=43)	3年 (N=23)	4年 (N=6)	全体 (N=73)	2年 (N=86)	3年 (N=10)	4年 (N=4)	全体 (N=103)	2年 (N=392)	3年 (N=197)	4年 (N=35)	全体 (N=674)				
問 1 進め方・到達目標の説明	4.42	4.64	4.17	4.46	4.31	4.00	4.75	4.29	4.39	4.43	4.43	4.39				
問 2 出席状況	4.51	4.78	3.50	4.52	4.44	4.20	3.50	4.35	4.36	4.43	3.74	4.33				
問 3 意欲的に取り組む	4.02	4.04	3.83	4.00	3.97	3.80	4.25	3.95	3.99	3.96	4.09	3.98				
問 4 授業の内容理解	3.81	3.87	3.67	3.81	3.77	3.70	4.25	3.80	3.77	3.86	3.77	3.80				
問 5 到達目標達成	3.79	3.87	4.33	3.85	3.79	3.90	4.50	3.83	3.76	3.87	3.86	3.80				
問 6 シラバスに沿った内容か	4.51	4.52	4.00	4.47	4.45	4.30	4.75	4.45	4.53	4.50	4.49	4.50				
問 7 学生の理解度への配慮	3.98	4.22	3.83	4.04	4.28	4.40	4.50	4.28	4.26	4.19	4.37	4.24				
問 8 教員の声や言葉	4.49	4.65	4.50	4.55	4.58	4.60	4.75	4.58	4.61	4.64	4.71	4.61				
問 9 黒板の図・文字	4.14	4.35	4.33	4.22	4.36	4.30	5.00	4.36	4.37	4.38	4.51	4.36				
問10 授業に対する熱意	4.37	4.48	4.00	4.37	4.52	4.20	4.75	4.48	4.42	4.38	4.46	4.39				
問11 受講してよかったか	4.33	4.43	4.33	4.36	4.52	4.20	4.75	4.50	4.47	4.43	4.46	4.44				
問12 勉学する雰囲気	3.72	4.13	3.83	3.86	3.91	4.00	4.25	3.92	4.00	3.99	3.97	3.99				
問13 授業で興味が増したか	4.00	3.91	3.67	3.93	3.97	4.10	4.25	3.99	3.93	3.94	3.97	3.94				
問14 将来役立つか	4.16	4.00	3.83	4.10	4.17	3.80	4.50	4.14	4.16	4.08	4.09	4.12				
問15 配布資料	4.21	4.26	4.00	4.22	4.16	4.10	5.00	4.19	4.23	4.25	4.23	4.23				
問16 総合評価	4.23	4.48	4.50	4.33	4.35	4.20	4.75	4.35	4.34	4.37	4.46	4.34				

(注)各学科の全体には学年不明分を含む。また工学部の全体には学科・学年不明分を含む